源氏物語評釋

帚木

二

第二帖

帚木 評釋

【奥入】此巻を帚木と号するハ源氏の君中川のやどりに方違へとて入給ひしに人ておもて
まゝ〳〵にやつれたるくゝ遊なゝびあるゝ事のかをとゝめてそ
のゝ〳〵れたるよあやるくまどひぬるゝみとのゝ給ひしをきみかゝるふせやにあ
るものゝさまふにるもあゝびきゆるもてきぐとゝ〳〵ふなりゝおもて付る名ありこれ
坂上是則がこのふやふせ屋よりおるもてきまのゝとハ見てあハぬ者ゝなとゝいへるをを
とまるく帚木と公義潤伝法あ玉の端よ其ふふせ屋といふ所よりある事あるをもてこれハ
帚をあてゝるやうゝく近くてこれハそまふ伝ゝる事もなゝ
あゝあ公よゝとゝ人伝ゝ云〳〵

【新】凡此物語の始終の作ハ光源氏の事なれ共其ゝ序のゝ〳〵ふてこの系譜ふつゝく源氏の中れ
源氏の女を淳和ゝ〳〵ゝ始ハかのうつきゝれ君よあれバ名とせゝふやあゝん或説ふ此物
語ハ作ゝるゝ者ゝ又若ゝ〳〵ゝ事を物もゝ〳〵げゝて出りゝ千四帖もゝ者のゝとゝ事ハ
あゝなれ物ゝとすれバゝ者のあ事ハ出ゝ者ゝ系譜のごとく此源氏
て始終せゝとゝいふハ物の作ゝかゝ者ゝ出ゝ者ゝでみゝゝ故ゝあゝゝ者ゝ紀ゝ夫人ゝ者ゝ物ゝて
ゝ作る物ゝて出物の者ゝ〳〵れ名ゝゝもいゝとゝかゝ紀ゝゝよりつゝゝゝると此ゝて者ゝ一つ二つれ
名ゝのゝこふ紀ゝ者ゝんゝハ古紀ゝみゝゝゝもれ名のゝゝもみゝゝゝゝふのゝかゝゝも
ゝゝゝゝもゝゝゝゝとゝのゝゝ又儒佛の書をゝくゝゝゝゝゝ例のゝゝゝもゝゝゝ
いゝゝゝあゝゝゝゝ古云ゝゝれるゝゝゝの紀ハ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

事をもるゝとしてうけるふハあゝでであふ世世のうぐゐすきをいとで上一人のゆこゝろ
ばけり一ゆのこゝろぎ一ゆさあどのゝわゆもとてゆるハ記者のさてゆどで作るべき

王 源氏君十七歳の夏のゝゝ世財宴ハ中ねゝ仏一中ねゝ仕せゝれ一半ハ桐つぼと紫
とのゆゆるべゝさて法ふ世ゆを十六歳とをゝれるハ偽ありてもゝ源氏君の
齢ハ桐壺ゆゝ十二といへるより後宴ゆまねあてふ十九歳のゝゝ一ゆゝるゆゆあひごゆハ
すべて齢をいへるとあるゆまバ世ゆゝを十六歳とせゝゝるもゝごゝの後ゆまねふてゝゝ
逆ふゝどへて定ゆゝるゆのゆる法話ふの源氏君のゝ年の遺ひゝ後ふ世ゆハ十七歳と
その一年ゝあゞゝるよゝハゐゝゞゝれゆゝのところよゝのべゝ

○紫式部の源ハ光ゝふんゆべゆゝやゝうあゝゝまゞ紫式部ゆハ細流ゆもゆるされるゞゞく
世物語一級ゆれ序のゞゝくあるを紫式部の源も又一級ふゆゝうて序のゆゝくふて源氏君の壮年
のゆどれゝゆ法ゆゞづゝとゝゆゆべて一つゝ源ゞゝ
いひゝゝゝゆゝゝゆゝゝとゝゆゝゝゝ

るハあしびは考の事よ平陽のるれそやあるを出るる平ぶるわもまあるるうて考をもしこう
をばさしもいそびしてこび分はびるの紙しをを初しひこう事をのこむとといるも考
き紙をかけそあまてるるびらもひるしかなるべくとれなるとも考へ合をべしかてはをよ
里夕新をまでの半どもハをすとと西新の平をふ言ハびいへうしてとのう伝人ハをさく
さるくまぐまでおのかしうけこうさんなる事もてる脉を次くよ川出こる同どもの平
小考くとてこる平よ夕新をふうやくのあこくまでハおもりしうらぶうるとあし
西新の平定よのちいびしくれもりしあるなどのつるも考ふべし拙まバ一つ尻の
文を受領びうりの平はるまをもびとう出ひくもしてる平をのあびうとあやなしこれ
條とをべしかしてるる時をいひこうまとうふ答といつる答もぬるるのれしてるかあで
この平陽夕新のれ此好きをしをさしこうとすべしさまでと答くを文よををの尻此
まうふこうて陽しつとんへれよく考ふべ

評 此考よりの夕新をまでハ一つ尻のの文ある尻をふ今らまてるさ年いとめづこうくさハ
いこるるびとのことハ今るべさまハ新びかいなでの事あしバをっ桐壺をふ源氏
君の傳をうに次ふ此をうよ平定くのるをといひさて中川の尻をひこうふすべて平陽をとまて
べしてこるをさハあしぶべしてふ平定くふづけて中川の尻をあしいしさて平をの事を截
てべちふ平陽ををうてさて夕新ををうに尻てとぶあしれこるハいと筆れ新るこうちするふ
つ尻くあしをうふ考まバ俗の事をきハしいしせびしてさりげ新くをまぶこうそ
さまてこるふやとぶ拙やゆるさるハ此尻ををあしるる平あるきバををのいをまくんやこうふ実ふ一級の序此
はづどもをくまるふく論ドあしいこるる平あるきバををのいをまくんやこうふ実ふ一級の序此
ごと尻ものふて始しくんをこうんしれこるる拙こうこれどうをあふさふちて某の陽某の

序あどやこうにものしてハ作りけぶやこうふて女のあしてをこうあくなつうしくをこるる拙此
さはあしくはバまぶとかくまびしくちもしてはこうあくを拙のうちはこうをこるる拙あるべし
はまバをのさ陽もを西新ふ源氏君のはしのの所此つまぐくあるふ尻中れたる尻源式紀五
などの作こあくを本づひくうちとはけ拙ぶこうするとれやこうにやこうあしを桐壺の陽を
とり出くをを拙をを殿のるまをてあやれをまをてるるあど拙作といふものくやこうあること
を愛君をを源氏君とむりづしの君とををこうあるとの新とけをを尻中ふあしふしるると同ど平をつをか
まびをりををを尻の半より中川の尻を引出しれるに係よハかびしていを方通へ
ふこうをなしてを陽君をあしり出をのををバをうををびしてあるバふてこちきりて
とぶりあるあどるぶとちどけあくをまををしいしる拙とあげしてかの君を此きハし
うしむとバかいをちてあしつみくる平づうひめ作をう

○恋定のくぶうれいいぶきとハ拙新ふいをまをををくをバいあもをこうあるうあぶう
実ふ此拙陽のむひしある所ふる尻ふるや拙よ作りあしのをうれ尻をあハれでをバぐ
めぐくををぶ中ふも初ふを西のをれをうを尻をこうて拙作のをあやうなるべき
ををこうみををうを拙ををを源氏君とを尻中拙ををこうるむつをこのふりをを尻出てうち
とけ云のををうをべ尻くををひこうを次を又あ尻脉をうしうしていよくのをこうふつををるる
こををひつひふ厨子のふをこどもを引出くをこうぶを作ふうを此陽のをををををまれるる
ふ左馬尻藤式紀五をありあひてを尻しくを拙作のをうふをありをを拙あどつ中ををうを
すきをを尻ものをりをを作をを拙作をを当夜のを拙作を拙ををうしあどををあふ一段ををの
きをを西よくをこのをうを拙作ふを尻あんあどを拙挟をあハをれるををををくをのをををを
尻るがををくのしていをんをるくめをををしをれバを西よいをるをとふ当夜のを拙作をあしう

ちくしる第幾段ことて評ぎうんをつけくるべし此脈十二段うてつひよを御覧
さるふ藤式部一人をまづ下まをく省くまきてくしるあぢ人はけふんきてくしるあぢ人ふとりみべし
さてもくさ式部空の大くこれすぢ人ちづ人のふ人の稚姓よつ尼くく上中下の品あくまをを
いひ次ぎ女の本上よつ尼てさまぐくのふぢくあるまをいふうちふちの本もくこひて
めぐくこ尼女人よのふるまづ尼より紙てねくるるうてよりて男の尼やうてもぐんべさまを
を伺くまく揮（サヤ）そいまをめくれうさて其次ぎまぐく女の雅あるまをどもを挙て
あぐくし尼とさぐあ尼との女尼やうをうう知くかくみよよ尼あ尼ものるよをを
ちげつくふ中ふすべて人種姓ふもよくぐかくちをもいそぐ尼さぐまあやうにちげうなる
んのおもふ尼なるを竟（ツヒ）のさ尼ぐくこ尼よふべさよくをいひくくよふあくひくるくと人
なくるべ尼るをふくくちんさふてくう次ぎよちあねき女のくせをいふ事のはいでふ女
の男よ對ちるんちくひをそれくあくいひ知くいまくめくくまくこ和持よめくくにさてを
次ふ三つのるれあとくを引いぐくうそべのくくぢちまる女とちあやうにまくとある女
とをくくべいひてなくおちよなんよりくるとあ和すべて準備のわちあくる所あう
そもくく女のをくふつ尼くるるくろ尼くせをおくくるあていくぐくこのあぐくし尼と
ちげあ尼とちあ移さとのこつまてこ事を一つも多せざる女人大くこ世事ふあくこと
なくさまこバ女人くふくふこれをつくくみ男人こまを尼思びんよくれよ男女のなろ
らひのくあちわ人なこ尼うくをいそんとてこれれ事をあやあくてさてあぐくあると実（ジチ）
あるとぐおくあむべ尼和の大むひあるよくを志めくくるものありさくくその次ふ人く
れ者あくくるをを行るやうふくて作ぐくあ尼とあぐくあるとの女を鞠（ヤ）人者てそのある
やうをくあ尼ふいくせてくくとくう次ふまくあ尼女のくめを歌中れふくくせぐくくうて

こちぐくくさ女のくあを爰式部よいをせて無いくくるなのうこまくちくは二つを反對と
くくるくさてくそのざくあぐる女のくこれ尼ついでふすべて女の才学ざてくく宗八世間（ヨケン）のくのを
女人ぐくまくるくせれいくくくふくてくよくくぬるをいひくをくくくるこれこの作りぬれ
日比のくんちくひふくてくそのせれ女のざくんぐかくくるをくくいくくひくいまくめ
くくるなかうこまくくのくの八物をく所くふ評ぎくるを考へ合をくくさくるべくかまバば
一段ふてせ中の男女尼あくくくひのくるさ尼をバ大くくふ出尼くざれくかくと尼思れば
尼くくく委くくくん人八教（イキヤウ）とも戒（イマシメ）ともなくさバなくくと多くくるべくにさ八人作り
ぬくのくんにくくひくむ尼よ去ぬで戒ぞくるどきバくくくくくくくくくくふ八あくくであくくさる
事つ尼をかくくさんとくくさまぐくくよくぐくくくくくくくくくく

その源因とハ見るべきありさてもことまさよ一段二段三段とまるまでもたてつひふ
十八段よりうて十八段の品定あどいつまふふるくよういそまてることあまどこまさて
一條のわちある所くかの段ハちやうのやうにハんてぬうよ上よりあどくく事のす
ぢも段ごとふくもれくばざりくくいふべくもりくどされバ今ハ又それをも省ク
但し一本のきくれよハ例の樣をつけく彼些さるまさるれさ侍のくをかりてあ
小示しつ

○承宣と平除夕新の事とハいくくもてさあまてるどくれもまどさふハあくだらの
馬陪がいてくことりう源氏君のちんつ見てさるあやくれ承もあくどれのふさ為ふ書
あくるあるあるふ所くふをあつあざの領を挾こて承宣の陪とかけさるまあやうよ
かまてうさまバくどくくけまどそのふくくて其脇あるくとを評どあらハさり
平平よ夕新君のすハ承宣の時陪中ハのかうり出れさる事あまバ承宣の次ふまどう見
出べきことあるをさハあくだして先平除君をあくハ次よやうあるあさまふ夕新をあく
ハさまてる事づうひさくふめでくし大よてつうあどうハ行見るようかるおりあ見でと
くどうどの見ふもまのさ侍見見ちくくハいとあきさるあるものあるをかくとりくへく
宣ひうけぬさ侍よあもるまてこて平宣のめづくさもいとくいらどくハおがやるあま
見んん人さるさこて作りぬくのようふぬけいでくるかどくくさをあぢさひまるべくくる
事ども行他ホもあくく

○平除と夕新とハ同くだの人あるを相對へく考こる中ふ一人ハ用さいとこまやう
よふくくてころうあるこちをもさるうふこうふこうは世中のあるさまをもふくくとひ
ちうてあのあハまもいこうどきふんのみさをもこどあくぬさ侍よこうは一人いうこち

をくくおくどふ行とけてさくくる用こさもあくくどこうあげふこあ見こるさあよ
かまてる八反對の法ありさていづまも同じ文のようある為よ平除といひ夕新といる
もんあるふ作こうさて又こまくくの人くくハ為見ひむのとある人くおもあくどるくふ
平除ハ國へくどうくるようふて事をくこちきりう夕新ハうせくむうづくをおいとめ
くるさ侍のくくまのあ為見伏案とせくれこうさて平除ハ國除事ふ生絶をかまし
平事をとどんくるあうう夕新ハ事づ見伏事のつのでふ
豚をとう出べき事あどうのて為まるあど皆こくそぶ見てむのとある人のう
をうくんとてこまくまづよく平除伏べくし

○桐壺と此巻の承宣と八この為為見一級の爲為ハ先生もいとれさるぶど
くし平平よ桐つぐハ經承宣と八生こう人事のうえをこう
こどめようの事を年月ふこへて為こまるまバ經よハ月日のあのづくう見見緯ハ
なまバこまバ緯あうあくよて世間のあうまあ為ども八でくるなまバ先このこてぬきの
人事のこうとなう出ふてさ侍くのあ為ハ作めくのこうこひてかまくるよハ
大うこをあくて平宣のあくくどえくるこれハ作めくのこうこひてかまくるよハ
あくどめまどくどハぬるあれバちくくいあく

○桐壺巻こと見の承宣と八爲為の巻あれバまや文章の法見こうこびいとむつくき
所れうくてあやよいくくみこる形あどハうとこうとハふとこうこうねる影ひもあうこまハ作り
ぬくれ宣くてかまてくるるふやあくんされどよくくく平宣のようつうを考へつくん
まバいひくらどめでくこ見形も又おくくこ中川のくどうようハ生くあ為ようつまる為

小や文の詞いとすぐ〳〵して大らかふいうこゝろる所ハ世く好〳〵こまこも作りぬ〳〵めさあり〳〵まりうはさ物のづゝ徐るゝ志〳〵ゆゑどもこゝふゝくよあやあ〳〵る八文ありてめで〳〵すぐ〳〵紀ハゝハ〳〵ゝまてめで〳〵

○野老そよ源氏君と紀伊守との問ヒそへの所二所あるふいづまも問答のきふあるゝ所よいゝ

見てハられれの詞の中よさゝひあくわ〳〵づけてかれるゝふそのへ所いゝこゝきは

やうにゝゝまゝるいひ〳〵らずめで〳〵すべて侍國言の文ハ漢文とハ異ふてこの問そ

のかさ所りてきふあるゝ所はさ〳〵ふ書とゝゆ〳〵して事情をそこゝろふこと今きめの

あるをかくあざやゝふかゝまゝるハいゝくぬけ出る文ゝたなりゝゝ物ゝやゝ此

所〳〵ハ次の夫〳〵所もいと多〳〵んをつけてえんあ〳〵ふべし

ひゝゝ源氏名のこゝろぐ〳〵

玉此下よりぐをそてゝ侍べし

附この紀伊の詞ハ相撲者の流の河よ出る者といふ名ハこゝまゝどのゆゑぐをそてつけはゝと出るをそうけくいてゝまゝ

釈この所伝のごとく相撲者より続きる文の脈〳〵ぐ〳〵ハ出るとゝ名の事〳〵

〳〵きゝ〳〵

いひ〳〵されのふとゞ

玉補此とゞを所のゆゑ所ゝぐと解出るハゝぐ好色のふれとゞあるべ〳〵の漢ゝ流されふ附の世所風伝もゆゑのゝのゝ〳〵ハ〳〵ぐゝしやゝの数ひなゝ名ゆゑのゝれゝぐとゝ〳〵ハ下のいゝぐとゝあ所ゝえゝぐ〳〵

玉ひゝゝとゝあゝゝれとゝるおのづ〳〵れ文のふゝひゝあゝ

いゝぐかゝるすゝのゝぐゝもをゝく

玉かゝるすきゝぐゝゝあゝゝ名をゝ

あゝゝさんとゝふまでハその所ゝ源氏君のゝぐゝ〳〵おゝせゝゝをゝるゝ

釈すきゝゝゝいゝて即ゝゆゝるのゝ

あゝゝいひゝれゝあゝゝゝふふ

ゝるゝゆゝをゝまゝりと後世

光る源氏名のこゝろぐ〳〵

とゞ地位ゝなゝるゝ（源氏ん）ヒトシホ

名の世ふも空つゝて（傳）カルゞシキ

とゝのびゝゝひゝるかゝゝゝ（語）カタラヒ

寄〳〵ゝん〳〵の物いひ（世間）クチヤカマシサ

いゝゝく世をゝ（傳）ヒドウ

なゝゝびゝゝをゝ（悼）ウハウリウナ

ゝはゝゝゝれゝゝ（笑）ウハクシタ

みゝのゝゝゝひゝ（内裡）ジラン

ゝゝひゝく（大）おゝいゝのゝ（殿）

をゝのゝれみゝれ（疑）ギヤウ

ひゝゝ（侍）バカリ

ゝゝ（能）

ゝゝ（絶々）

ゝゝ（退出）

ゝゝ（交野）スツト

ゝゝ（然）

ゝゝ（交）ビツテイメキ

ゝゝ（奏上方ノ女房ナドナルベシ）

まぐもはなかてうぐいすきえ
をもながさんとうぐいすをつ
こえてかくひちえる隠事をえ偽
はなかてる世のんれとのいんはさ
ぐあをさのぐとかをさてさてをの
かくくるはんれとかをのさくくよ
をさーあそやくるぐるをさーるえ
さるはいとくくよるをちぐうえく
釈さるはとふ辞とるはいさう
矣まてされどさんるぐいふをを
くなや

あるびんをうれまるて
玉補をはをくふある方をおとめいくと国をふて保氏さのをかくいふ即作者の卑下まそ此抽僕の作う
ぐをのはさるくをうーうぬよりをトまとうとうくるかるおねいせ抽法ぐのりとはほまるとうく
かるのふね　花　はかの納云の松をのよふ抽僕のるぐも出をるふふまよく抽僕かるのおねとあり　釈　この抽僕今
はをよ僕りぐをおるまあぐるれさるまるとなるべー宗抵云作るお僕のんそ作る抽法のくふ翁するの西曽く
うけくるりとうりさるるなり
まぐ中ねるぐよ　玉　上の翁僧のすべて頃をうけくを始つくようのるぐもをこれるうるうちぐむるあり
まぐとりるもを始へをうりているをりあぐくいふもちめうくをひろくいるる頃とう
さうくひようーるひく　釈　この所ぐひはは体云あり何候とるねるぐるんぐとし俗云いをぐ林中の事歌を
よくーるひてとうふるあり
あるいとのまは　細　桐壺ゐも内ぞみのくれまーう
どくえぐくまうでるとあり　釈　この所はれでくきう
をのぶれふれやと　湖　奥入　なるれのとるむさい
いるあるぐれんもあるんと葵上るくるはひうとぐあるあり

さーもあぐめるれあれるるく　釈　さーもはるのまーうぬへ係る語脈あり此所のてふんばいと紛らー
きそひとうとうのいぐ宗祇注よかやくよ人の結ひそひひーうくも出べのはんよはあびきやを紀人よ和とん
らてくるあさはか上るふよりさもあるうるうるうといふ武
よあるる頃おるまばおつけふさはるくーーされがぐてーくはか上るくくとうかを
てをを加てくきくべーこのをを大うさ脱文あべくるがを
ちか上　釈　年上八木性の信家まて九帳を末丁とあ鄭ひ　鮮　荀子性悪篇禮積偽者豈人之本性也哉
まるとよはあるがちよ　釈　まるまるよはひきくぶくあぐちんんぶるくーるくををとつぐく注孫あるを折くーて
かくふは例の文法あり引ぐくとふうちつけのすぐくーーさるぐはまーうぬは年性ふ引ぐくとふるさく
ちぐーとぐひるくぜあんあやゆくあく　釈　あんいあやあく
うるくぐればおまーぐるるへかくを持とるべーあやあ
まかあやくをとうをさるあり
さるまーをさるまひもおまーぐるとる　玉　こまきまでの文中おるぐるてあるひーるのさまをひるくいるべ
此をの時れるとるはるぎーーぐ　細　此所は老皆保氏さのは性を出あーり作るくるく　新　ありぐるれをまひを玄
まうふきくをるふうつせくるつがあぐのまるまーぐれまるる
おるをるれまるれるるを
ふるのるをるんとるの表作あり
ちるのるみ　釈　作年まるれてーくるるべるうあ一時ふ人の出へをとべあて斎戒ーるるを抽とんとふ
くるるるくとのさーつくあるは保氏さの里ふかるるぐ　玉　上ふ内るのくきるひ
ようーーるひてとあるをけぐーはあるくーのさーつぐれるているくもれーるるるすぐくいくぐとうは頃はを
おはそくをるてんるべー
ようつけのはるてひ　釈　ようけのとはは世業よるちるるてのるるつくのは潤後までをとはるるべー
くるるのはくのるのるおづくをつとめるく　玉　きくのるのるのるは林中るく保氏さのおくする所あり。すべてと
むとは俗云ふ粧出してはるとはるふをあり俗ふのるといはるくるひと　釈　保氏さのはくのるのるくるべくを
はとあるるとはるひくたたは後の保氏さんをかーるくるくるくるくを
るるるーくのはるは　釈　所中るのは母は相壺寺の法妹ふ文るるるーくるるる

なぐあれまるたろ内裏間ぬいみさーつで
きそいとぐあぐねさぶらひ侍居おいとの殿大
おぼつるおくうしろめとおぼーられどよろづ
のけよそひなふくまとめづらしさはゆ。
調装飾ナニヤカヤ珍
てーどいで給ひつ。むすこの君ぐちぐで。
のたとれぬ所のゴバンショ子息源氏
の中将頭中将トシル又人ヒ全御オウコウ勤腹
出ぎとふれをヒ他ノよういんやとくおれしく
戯ぬるのひるうの。たのおとぐれいとちうづき大殿大セツニレ
移ふすこうぼ。住所頭中将大弐サウニ好色
ぐはーさあぐ人ありぢとーぼるこの方
ウハキ左大臣殿ノ方頭中将ノ住モラル

やくぐろうるをいふ
がくがくんをもあをびをも 釈がく
ん八漢文章を学びひろとあそ
びハ管絃を習ひひろ
まつくれ 釈糸のねまつ
ふよせて人のもつまーくえをれ
ぬをいつ伝ひり
うーとまうも物ぐ 細へぐく
あくむつびまるふおのぐーく礼儀
をもまきて仕ひのふとこ見別ふ
宝の物伝ひど打とけーるーくの始
ふけるあるべ
つまぐーとふるーてーてう
詳上ようもぬれまるれたとうき
物ぐる脈を取びーふあーいて
打とけその物伝をもあやふせん
ぐーさとせーれるいーめぐーし
おりよぶぶ 新式ふも伝もすぐ
らは夜ふよとり火を御殿油
とぐろうあをのあーれのあ文
なるれバれとるぶぐーとふ
いろーの紙るるみ 釈艶まハ
うさしの花やうふかるもふのろ
いろの紙るるとるるまり
さりぬぐさ 湖中ねふんせても

つくひまぐゆてぬのいでいうーぬるす。
カザリ光ルホドニ源氏
うちつまぐゆくーるひつよるひるがくあんをを
連夜昼学文
あろびをも。そ。イッショ
ぐぐいづくすそもまれそきくーぬるがぐよ。
習楽ツキモツ
ねのづくかくーるもはびぬのうちよゆもふ
自然畏
こくをもるつ
隠ト
ぬくーてぬるんぬつまぐぬるる
タイクツサウニ睦
ぬくーてぬるめやうれるよひの
降暮シツポリ夜
ぬよぬぬよもぬもぬをさくーくぐるくぬとのぬ
オホカタ少ヘ渡ノ
もぬぬいよりハのどやられるこちちするにぬと
ツネ御殿
なぬぬちくくぬみどもなどんなふついぐぬ。
ツルトタ
油
ちくたみづーるぬいつくのくるぬみどもを
近書籍
御厨子紙艶書

ひさいで。中ねとうふくゆ。がれば。さりぬべ紀。
すこ。そ。ん。せん。がそんなるべきもこそ。
ぬいねば。ぬ中ね汁。れうちとまて。メ行ワ小ル。と
ぬぼさもこんこそ。ゆ。れ。ぬ。ナミ。ほべる。ぬ。
くこのい。かぶ。ぬ。ほどほどくよけて。う紀
テイゴロ ウラミ 交 分限相応ニ 金ト
かつ。つ。も。ん待うなん。ぬのぶ。ぶくう。め
メンクソレ〳〵ニ
ぬ。ぬ。ぬ。

てそこのうちに 玉 あさけまと淺きうてでもうたとこのむべし
あさけのこのふまをそこのとら
くくもばくくよもべくくくく
をうのつくく 釈 をうのまつけるふこのてくこのくくをど
をんなてするくうちハ 発語
おのぶんようらくきも
河 サンの分おそびそよ色きし
そのうをを 玉 そのうとハ上の
まちうたをうのつくうち
くすくくびをくていふく
うふまをのすをハ 釈 右の二
くさのすを捨ぶこ必定のまく
く取入んびのんハをくくとし
うびくうをうをくくわのう
玉 これハ上のうをくのうの
くびのあるをくあるのをと
いをくのを一特よのあくを
釈 のをくうをくとハ絶くふあひ
をくう藝能のくびをこそれを
自をくくをあびくうあくくあるを
ちやあびくちくをひをてあめて
釈 父母びをを女ふつをこそいうを
いうをうくづきあびもるをいう

あるうれどやくくをんれうくちるまをうをくうをうとべ 表方
だうのなをちけよてをうをうをうれ 手走書
いくへををえてうちり為おどだうのハずのぶんよ 随分
よのくくをハをも地ほうのとみのうまをどをもま サウオウナ 多有其
をくうをくくをくうのでんをうくびをうをうのを 実其方撰必
くくくくくをくくくく

をバ大てらのさいぐるく
まもびいどすに　玉　きべてまもぶ
とハそのあさ海のまをくるをふ
くるさん　玉　爾さんと下さんふあそ
みおくろう　釈　見そめる時ようう
やうくよ初るをんおろうとえ
うあ尽くるくきもぐ　げあれハ
釈　甲乙の点つけくる清瀧をつぎ
てゐ江べ〜うめ尽くるとんの不
平を路息〜くるさるあうくぐろ
しげハ諧江ハ中ねの和ひうくる
さまふくるまてくるを俳海ゆ俗ど
めをあくあげて中ねの作は海氏
見よまぐうくんゆ中ゆ海氏ふ
うあべうんうあきくるくき
とあるハ和さまとハくくえあれバ
いくあべてふあ〜ねどこ〜
湖　中ねの和俗をこうぐくあ
ハ海するふハあ〜和どこ
あるあ〜て　玉　あこ羽小説笑
あうとうへこ〜〜
その〜ぐあもあき人ハ
玉　上よこぐかこどをすつさへて
といひ和こうあ尽げてなどりこ〜ハ
かこどある女あるをそきバくりの

んやとのうへだいとさばうあんあこうよハ誰
うはすこ〜れようは俗こんとこるこなくくちを
しる紀と。いう好ちとぬ〜ゆだうのすぐれこる
とハめぐ〜ひとこくくて俗こめ人のきれこく
うあもしぬまバ人にめてくづこまてかここく
これ〜ぬ行くぬ然んこそのけきひこ〜のうべし。
中のきなこのあん人のんこ〜和のぐだこれきこく
こるあのあきもみこてこうこべ紀ことかこく
ぬ行こるぐ〜きこきのきぐみとうきこはる
なるまてば。ここ〜きこ〜ぐこ〜。とていとこ
あげ和こるこ〜きこるもゆこうここ
ん　誘　ソレホド　ケ和タリ　寄　トリドコロナク　ラチノ　優　アカヌ　数　生　自然　形容　各段ニチガフ　種姓　貴　等　勝　ホドウ　ワケヤウ　差別　ドウ　卑　人カシクモナキ　直　ワレコソト云　飾　劣　上　卿　成　下　刻　極　分　ドメミチニモ　公　カホツキ　沉　没　位　置　如何　品　々　分　元　種姓　貴　耳ニトヾラヌ　殊　タダ　アキラ　原氏ノ　カニ知タリゲ　中将ノ　聞ホシキ意

ぬ和ハ人ハ人ハ人

さるを委しくあらしとうはつまぐくあるを聞ふれとけてくくしひろふ情系をうしあそびがくめふ一段ごとの切くに聞ふそのそうきを捕ミ入まてくあるて俗のいくめでくに帝つさるり此脈を先よくヨきまへ動て
よむべしさて又要段ハ出ル稚ふもいくれるぐくく上中下
ものちくの中の系統すをいくんもさくくるあふまづくちを
ちづくく信へそぶさおきて中の系をとう出んとしてその中ものもみさまぐくの系ありくひさもさふいひざに
ようの語をちうけて源氏さの詞とうく抑へてるくよくく時ふぐ
人のものおさうく生まこぬまバ　釈人の稚拙をくせまてるハさるがみくるめ
あれバ出のづくくそのけそひこうあくせぐくに紀くふんあるさ
おのくぶのくそくるりりふをもそく　釈中系あるハさしてく人よりてあぐあくくぐるりりふをもそく
者のおりあさも見てしてうるべきとく　玉よりあのえくとうとくくくべ
へくえくべ
いとくまあけなるも　新中おおる隈あげよのくまへバ行ぶす秀くくんすをゆうくおぐをまふ問と設せ
とうむるくさてをあくやいゆとたのぐとに八一とてうのふく行をまぐ中ものきざみくてをあのとてこひ
をげまれさ海あうくま隈曲あぐの字を出て入めぐうさ
いづまをこのふよおきてうとくべき　釈人のふさうくといひ中のふといひ下のきざみとらをとけて三のふとうて
あわ人の　細諸を文ぐの時を拉て次第ふ昇をして公ま
左のう海れくく茂式アのぶくう　評この二人をあうう出
のくゆてハいとくうぐくくるまバこの二人をそくふざそ
いひうとあぐき源氏ふハあくふおおうあぐくまふとうま
まくこの二人ばすも恨のおくふまくうハ出くるべきをそ
ぐうあるもそひのおおくちしていとめづくく
海ハいくふこうんとて　釈すぐく抱ふハおふ出ぐあ肉よのくとぐくり茅くりあるあ篭（コモ）をといめく
くくハ源氏ふと共よくうりてちうまぐくをぐくあ年くく
者のすなおれ　新今のせまてのすきものとくすてこゆて
かのよくいひとうまるを　玉源くくまうある新まぐよくゆ
ようゆとうりていみうり

いとくまくんとおうう　玉よの女れよんあくんをうあ
あうのうまぐくも　細たる臣のすくおの二ぬ系を詩
さるべきすぐあるぬハとハ公卿ふあくべき稚拙あくぬくさハ
公てくハ臣ひきくるとくくく　玉さハうぐくハうぐくるくも信
又ものくハやんてくあさく　細これハ種姓ようん人のおくうくあ
この系ふれ女のすをまのおくふんてくう海ふあくうくやく
くくれ海ふひくくくくおあうせてかるまくるあもあくされバ
せるあくある女のくるぐくをくるよ海ぐあきてつんくくよ
ようてあくべくされバ海くあもさる説ハたくくあさく
んハんくくて　湖ようくふあむくくようくく時のうあぐ
ようぐくふくくるくて　玉くくハあうりのうりまぐくもそくくとうくくく
ずやあくくくいひて人のおけくるふ　孟受領とハ諸國の守をいう國衙庄園のすをとうけふりのく　釈人のふけす
くくさぐまうくくるゆあも　湖受領のおよ宮うあぐくく又次第くくありてくく　玉きくくくくハ隠くのおてく
中のふれくくうハあくぬ　玉けハ異ゆくあゆくうぬくうあ
くうかづきくうりひあう　釈玉のちけハ外皮ある系よ肉
他宝へ出くくぐくく政を執行ふあるよおのづくく勢ひもつ
あきくうこの作者の時も大くハせるのきくくよハあくざりさの
くくくくく

やすしうふをおてあり
玉 公つまおぼれバうづんをもたし
そひうゆぬさいそひ
釈 かくしたゆあさうふをづたをす
ものすあうこもる彩ひをよ
すづくわぎづくしたよ
玉 まぐくこハ上のおれれるもも
今せくいうう 釈 さくびもくく
ゆるうふ後く女ふハをうあり
べくくのさこわぎづくくさこハ志の
振りくゆるをよ
くくくんのいくんやうこく
玉 今くくゆのいくハさくふおぎづ
くしたをうくとゆくハあくるあ
をさくをなぎくくたるとゆ
おの源氏ゆくいわく源氏ゆくハく
くうをなゆふべきくゆあるふん
もえぬくくんのいくんやくふく
ゆくのくくゆぬんのいくんやくふ
くいわ源ハひくくく
釈 くのさおくくまぎくくりゆく
くハ源氏ゆハわぎハくくゆ栄ゆひ
あぎくくさもあぬくくんのいくんや
うふくくふさゆもあんゆ考ぶ
なぎくさくおくむくくハ後ゆふも

くぐかうそあふううもまゆする
ゆふうう実ふうくむよハあくば紫
當夜の御法の法師をあくそくる
寺二の院あり
ゆくの京御世のおわく 釈 おあひ
紫院ハ上の京をらひくくれたハ
おあれ法より下げ下の中ゆそひの
おふめづくくたるあるをいて友
射の文法あり京柳かられをも
中のあれくちあくくいれるハい
さくくさぐて
うちくくのめてあくくそひ
釈 めてあくハ女めめてありざる
あうくくひくうきのおくんゆをも
いおくれくんハくちをくくんく
くくふもいくハ海ふも及ぬさく
あるをくてく 湖 彼女をなる
人のそひおくくむくく
うちあひて上くれくくんもく
釈 くのおあひハ女の男のわぐふ
あひくるひくゆるもすくれるを
いく上のおあひくハさくくろ文
あうきくくれゆくくのぶくたのも
ぶくくくくの中れ女のくく別く一稱
みハあく

ようゆるくくすぐあくぬよのくれ出くくと
来 サウライナンベキ 系
もぶくはいくどあほくくなくゆ。又めくハやくんくと
サウハイフテモヤハリ 別 カクベツ
なくたくくぐあまくどぶくくくくくくすくくれく。
ナル 徑 テガハリ
ゆせくくたくひくぶくくくくくく

上が上八寸ばかり
釈 上が上のまへ[illegible]
[illegible]
玉 上件[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
釈 [illegible]
[illegible]
釈 [illegible]
[illegible]
釈 [illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おもひくべし　釈父の年おいたりとこそ
ようの伴をもぶ婦のゆふひあて
ゆゆあんあらもたびと欲まて
きるくいらくそそ〜。上文りと
の思附あるあり甘あひとあるとこと
まで八りくハ改げれの詞やうふの
くもあるやといつくもきふたるぶこ
ゆるすとハ甘ずれどもさあるま
ゲるあるべきかどあるねバるくと
いてるハ中ねるも甘ぶもまづく現
わ作ひてる外の徐くれれ考おべし
いでやくくらくげあるようをと
弄　浮のるる英上のるをそひありせ
ずあく　玉下のをのぞハ世あるねをの
をあり　釈をりのの下に傍注のご
とんさをいなさしてと。受るる
ゆさ世をどりのるく
釈これよう浮氏なの甘くひあ世て
ままくめでるるくちをいて俗の
脉あるをひりと臂をつきく
ようふれをを大分俗ようふある
とうるとくしわるげハ公紀ふ氏貞の
るあるをるふ体ふあり
あくまるく　釈飽足まるく

れるひくのるるやとやくるうらん拠と
いそぐ。いでやかくのちるとるあよぶふうるげ
なるよ後とあんておるすで。ちるさけそど
かのあるうたなるふなりぎるうをちるどげ
ゆきるの一ぎるひくひあどとうちすて。
ゆ著　ひ即　へるはるるぶいとぐめで出るく。
女ゆくるなまるまりこのはるうあるハるぐ
かみをえるいぐてもあむあくまるくんこ
るふ一さあくのんれうへどるをかるうあるせ
ぎく。おるるれよふつけてこるるハとるのるも。
我　うちきるのむべさ後えるるぶんあるハ
憑　妾　撰　多

天くこのようにつけてゆるるハ
玉いは段ものくんるるくるてま
てふさるるく　釈公ハ難のさと
をのこのもあるけるるるるる
釈たるる男子のおるくのるを
るくなるくるるあり
よのるるやるるるべきも　釈るの
るるるるハ改事をるるそあるき
いるるる拉石のくんるいふまるこのるる
わるのるいるるの太るるるるるる
拾改るるるるるるるるハ
るるるる
るるるるるるる　釈いるるる
るるるるくくるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるる
得　決　官　困　真　出　難
トシ　世　量　賢　人
器　政　事　知
事　廣　助　靡
女　主　足　譲　合　撰　玉緊要ノ事ヲ云ヒ　ハ　カ
ハ　ス　コ

行ゞ下蘇ゝ〻〻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行ベ下靡ラ

とあるまじかりけり

河とゝやそとすれどかりけるかく
されどあるかいはもゝとあるさき
るさに古今集俳諧 釈 とすれど
とあるまじかりけるとゝ引きてこゝは自然の
差ふようなるかゝしゝ此方の釈ふいと
べしあるべきるさに雅語俗語あるは左
様なれば右ふさゝぬとゝんとゝとゝ
一つよりあるまじかりけるとゝ
もあるべしとゝへまでなり

あのわよさてもうねべきへの

釈 あのあの八斜ひるとゝあてもかゝ
るべし俗ふゆゝゝゝゝゝゝゝゝ
あるかるさてもあねべきハそのゝ
ゆて恨ゝてしはあるゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玉 けどすゝ八十の四
くゝゝとゝのゝへゝゝ俗ゝ 釈 此
現のゝゝ申も西すの点つけるを
よく恨ひて注釈を誤るべしゝ
すゝゝゝゝさんのすゝびまてゝ

釈 すゝゝゝゝすゝびまるをて
さゝゝくの女れさゝ代んゝゝんゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てなのゝゝよさくもるねゝたへのすゝふき
をすれゝくしゝ仏のすゝびまくゝへのあり
さあるよゝあすゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひとゝへよゝひゝゝむゝゝさゝゝゝゝゝ
おゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ

されどあるよ　玉　されどこハいかゝあらんとてもかくもとゝいへるこゝろハ
ハいづくもさやうのことゞもにハ世ゝ人のさしこゝろ
よのなかの人をもとゝ人あつまりまうふ　釈　てもれもとのあるこゝろをかれこれ人等ふさぐひくし
人よりおもひ　玉　あびるにせゝにおもそこゝろをとゝ人ふるこゝろあしびといつるハこゝろをぞ
君ゝこゝろの上のにせゝびよハこゝ　釈　君ゝこゝろハ源氏ゝにはぬをこゝていとう上のにせゝこゝハ君ゝこゝろハ
世のをゝ人おれハ世上もおさ位撰びとおさゝまゝてとハ新ゝ世ゝ人ハ行これと
ゆゝよりおゝ人よりおゝうゝんとゝいつゝゝさびひとハ配偶をゝ
ゝ偶をゝさゝ
ゝ　玉　細流よゝゝて白を切てんをとゝ上ゝけてゝるゝとゝあるゞゝ新ゝゞ後ゝ紀ゝ男ゝゞふ
をゝゝゝひゝ作ゝをゝゝてゝ君ゝゝこゝのゝゝるゝゝゝゝ人ゝゝゝゝ

事ハ女のよろづのるれかふあるのあるくハちあるまじ
とゝ同せしびよくゆるべし
あのありれちうすぐゝ
ちゝたのくもぐゝとゝるくんをゝくべゝそるをさつのでのあさけとハ彼月ハ彼月をぶのをうゝ
ふのようゝふどするゝんとゝてぶゝくゝあるの下おでぶゝをくゝ次の同へうけゝくんたべゝ
をゝゝきゝすあるゝ
あゝれちうすぐゝとハ物のありれゝきるゝ
まゝまゝくゝたをぶちをゝて
ある方ハあゝてもよるゝべゝとゝたゝゝれどもゝをゝまゝくゝ
ゝたをぶゝとハ夫の後ゝてゝるべ夫のゝゝるゝまゝめやゝたいとゝるむすぶのゝくゝてゝゝいてゝるおゝゝゝくべゝ
みゝをゝゝゝぶちゝ
ゝゝちゝてゝゝゝゝぬ女ゝ耳ゝより物へゝゝゝゝ髪をゝゝれゝゝゝふ歌髪ゝてゝたゝゝよ耳ゝより物へゝゝゝゝ

つげくるこゝろひとうれたひも絶きもせずくるしくあられハ歎息のあるかぎりあるかぎりなどあるこゝろに

玉 夫のそれさまを妻のそなてなれハ行るゝてをどりなてく 釈 あるこゝろよハ強(サカ)くあるかぎりぬさくあるとハ

あるこゝろにおどのあるとハ旧説ハひがこゝろ假字もゝとかゝべしさゝあるだおさゝんハ 玉 うち仰のき居るふてあるこゝろのさまを云あり 釈 そのゝとんもつゝしてゆをを伊ぎそうゝとゝる伊へいぐハくちをゝゝぬ

玉 くちをゝたようをつくゝろ詞ありこゝぶゆをゝこゝとゝるようこゝまで一つゝきあり

評 かくのごとくだ女をまゝとをのきあり俗云ゝたてゝだゝふき面の女ありさてこの女のさまをかれゝるハさもあるべきうあるをそれをそひさゝん男のんをかれるゆつきんの中ハ入くゝんさゝんゝがごくゝまていとゝ〳〵ゝ幸〳〵あゆたまでゝまめでゝゝ

ゝぐひこゝふゝこあだて

細男のお入べ

出入ハよたけてもゝおいゆをきゝるこゝの人乃生くゝずまひよだあゝだこれめゆもこゝ

ゆをとゝやのゝるゝさ面をゝうゝだ人ハ(ワザ)とうちまひぜんやゝちゝくゝんゝのゝこゝ

ゝだひゝゝるべゝらゝんゝかゝゝゝもあゝこゝを

ゝだやゝとゝうゝちゝもゝまれゝなゝゝぐゝもゝゝぐゝゝ。

ゝ〳〵ハ(ワケ)あゝやゝあだだいゝやゝゝゝばゝゝぎゝゝゝゝ。

ゝひゝとゝふゝゝひあゝる幸あゝどゝはゝる式。

なゝふゝゝはきゝゝせゝん。と云へばゝうちゝゝむゝれ

てゝ人ゝきゝぬゝゝひゝでゝゝゝひゝもゝせゝゝれゝあゝハ

きゝゝれゝうゝちひゝゝゝゝゝゝゝこゝなゝふゝ幸ゝゝ

釈 こゝより大やゝ〳〵ふ地やゝ〳〵ふる女のゝゝを捕ゝゝゝゝゝ

ひゝきゝゝゝゝひゝて ハ 玉 ゝゝハぬ

幸をハ男のなゝけゝゝとゝゝゝゝゝゝ

ふゝゝゝゝゝゝゝ

うゝむ。たゞひとすぢ（平生）ヨソヽくしく（シク）くんづほ（キニクハ）
なほ人の。をりあしよほきてぞ（トキヨリ）ぐそを（デキバレ出映ノ意）
るやうもあらうおどぞ。あるほのいひも（アルイ）（論者）
ちぐあうひてぞ（決）（難）くうちふぐく。いまハ半ぐ（歎息）
ちれおもよゝじぞ。かちをばけゝふもいちぐ。（容貌）（更）
（種姓）いとくちをゝく。ねぐるゞはきねばほえ（ネンニ）（ネヂクレ）
ぶよおくぶ。半ぐひとんよおのまあやうに。（サヘ）（偏）（信）（実）
ぐうるんのおのづほなゝんよゝべをぞ。つひ（一生ノ）（趣）
（静）
のあれこ所よほどひおくべうりる。あまう（餘）（置）（カヽリドコロ）
ほ。ほよ（オ能ナドヽ）（キドリ）（添）
こびよとひすゝ。ゝおまてるゝうこひうん（少）（後）

を。あれぐちよあくこ。うゝうやよ（求）（加）（キヅカヒケナ）（シヒテムリニ）
くのどくほ所ぶふほよくぶ。うちぐのあさけハ。（強）（表）（方）
（オダヤカナ）
おのづゝうあてつけけべきゝぞをや。えんよ（自）（然）（モチコミ）（ヒトオメ）（艶）
めれちぐ。うゝみハ用言よりもべゝ。ゝ本をも。ゐて（シラ）
らぬさほふまのびくぐうへほまおくみさを（コラヘ）（ウムキ）（ナンノヘンモナク）（ヘイキ）
ぢくうん。ひゝうよやひあする射ぐ。ちんうる（メカホ）（餘）
なくすぐほくほこのぐ。ほくまある。ゐをよみ（オソロシイ）（哀）
ほほ。あのづゝぐさうゝみをぐぶあてぐふほ。（男ノ後ニ見テ恋シブベキ形見）（ノコヲ）
ぐゐ。よぐほれるほづゝおぐほ。ひうれ（セケンドホキ）（ヒソカニ）（隠）
ぬうゝゐ。（祇注ニハ久ふまゝゝる射を語ぐ）（ヒバリ）
（童）（デ）（女中）（ヘラミ）
よくうををきてぐとあまようれゝぐ。ム（涙）（哀）（悲）
（涂本よゝ作ハを）
（讀）

今ハ昔ていまうゐ形ようゐもよう
ぐにとさとう記さる。乞三記の太元
あるべゝ。（釈）此伝のごとく此伝ゐ
のむひとあるゐゆゆてつひよ物語ゐま
めやうゐうくをとゐ。ゐよせんう
ゐふまぐゐさう。をいうんをつぐび
ようべ。（玉）ゐんすむ女を元ゐふか妻
あうとうゐハぐう次ゐつひのうゐを
ゐといるぐ女妻ある
あまうの中ゐう。（釈）あまう体云
あうゐやうハ小指よりうぐゐも
あれひ才どるべきゐあるゐ中ゐを
ともにうきゐもうゐとあるぐとし
ようこびようひ。（拾）俗ゐいゐひうひ
ゐのくんあう
あうれうゐうあんをもう
（釈）あうれうゐハゝゝゐあうゝゐあ
方ありうもゐひて求ゐ如べゝとし
うゝうやをくのゝうゝゐ
（玉）これ即上のゐまあやゐまうゐ
んゐおゐゐきいゝうゐのゝ。（釈）つよ
くハにハゝゝゐてゝぐうゐうゐ
うくべのゐうゐ。（釈）うゝべ表ゐ
のうゝうあうゐハ。ハ流才芸の数を
いよあるべゝ。上代の八流ぐハ次く

まんさ〜ゐひて自然とあてつる
やうふるべきこうぶくしといふさし
評 この段我我よりそれさるべく
思えのわか女のこれへしも自然て
ちりたはかくもあらるとうひ出さ
るを結びこるふて世こあ由る女の
拙を海〜てつひふけまやたし
ろまて花ゆとめくるいとめでし
人のおりの花はる今さかてしあく
あるべちふこう花彼〜花ふ拙ゆ
女を撰ぶ〜はかくのでしくあんよう
和ふせんこうる花すをうくゆひ
奥く作者の予れらこ花をゆふ
ぬ〜まて法の原よ名ぶ〜
ちあれさ女のんぶうさを一種をて
ねぢけぶう花をいまゆれう
あれ下よりべ〜
うへいまふくこをぶうこ
釈 つれのく〜はまあゆてあはし
玉 こをふあてつけてもいあ
くぶまぬせうふんをつけくあてう
くるあう
もぶ花てこのハ 釈 執念の拙すど
きまでふさゆうこのそこうあて
とゆこもあるあべ〜

ぬう花半かゆと感をさへなんおそて作!!
今なもあるふよいとかるぐ〜くこてさてびる
ここあう。いざ〜ふ〜らんをとこ涙おきく。
みるめれまへよつ〜花こてのうとれ。人のんを
見〜ぬやうによげかまて人をまどし。
んをもうんとするるどよなぶ花せの拙ひよ
なる。いとあぢ花おきる彩ゆんふうやおど
ほゆ〜てられく。ひそまこさてこぬればやぶ
てあはよなりぬう。よひうねどハいと
んをあるやうふてよにうつりみをぶくも
どへらば。いであれるう。かくるおぶ〜

拙花よみ〜をきて
釈 むう〜拙花のふ〜ふ彩る女の
こをを泥〜るを女房のさうを
ふ久のきてて
んぶ〜ふ〜らん男をおきて〜
玉 男のはぶ〜の体さんぶ〜をぶ
ち〜ぬりのやうにさ〜あるうて
ゆはふぶ〜つ花すあとてもこ
こうをもうんとするぶ〜よ
釈 いうまちるようと男のんをん
んとするぶ〜よ
ゆ〜花よの拙をひまある 玉 さやう
のすふようてつひふ離別すこと
もあるをいう
ふうりやおど 新 恋者を離れ
喜撰法師より拙きまふべきこぶ〜ふ彩る
ようけて情のすみて尼ふあうぬ
べ〜とあう 玉 ちぶ〜ふ花ふ〜よ
ゆひあまりすぢのよ〜ちうむ
ひすふ〜ふう〜しもう
玉 上ふんをもうんとするゆふと
ちぶ〜くこて此女ひすふ男と
しとそひをれうふあ〜ぶるし
ふるぶ〜ちう 拾 御等とふふあ
ぶ〜ふ〜 玉 古き女房どもふ〜

なのよふるよ。おどやうにあひ花れる人き
とぶ〜ひ。ふ〜すふうしとも花ひをれぬ
をとこ。ゆつけ〜涙おとせぶ。ふ人ぶる
ぶ〜ちあど。んの体ひをおそれあうそあ
を。ゆあ〜花ふ花をおどいうよみぶ〜ふ〜
ひぶみをかはさぶりてあ〜なくんぶをけれ
ぶ。うちひはてこぬう。ちのぶれど涙ふぶ
ぬまぶ。ゆ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ふんぶ〜ふぶ
し花ふ〜ともおほふあるふ。ちとはとなふく
ふ花ぶ〜。とんをひつぶ〜ぶ〜ぶ〜ふ
ちゆんふ花ぶ〜よのもぶううびかてふ。ふ〜て

相識 来 向 離 使 古 額 自 可惜 探 髪 御等 得 悔 濁 深 半

評ひげくをうたがごろて

国あるこ後をこだすてこうすよ
と後悔さてきあく
うちひをこぬ〜 新 ものは泣きまの
口つきをいふこ〜 釈 むーこ〜嘆
字をこのやこてて俗ふびり口をく
とうあまれり

評 ぎこふかづこひてあれちのか
もる女のんがこの後悔おき面とる
がごと〜此類今世ものをり〜あり
ふこうふきあこがこうもこ〜

湖 俗少濁世あ巳時よりかく
ものあのちんれふまこうびあるハ
こうて恋ふきこ〜べきすとこ

釈 うこがんとこ尼ふありこあの
悔〜きこあこくあもくあるあふ
なきこうこびとうこくこあ尼ふ
いまあこ恋ふのすく
こくぬすぐせあこがこ〜

釈 すぐせハ例の宿因孫こ絶まで尼
者因あて尼ふあぬうちふこる
ものてこうかこ〜こんやもく
やがてそのそひ出こ〜

釈 やがてこうあ尼かこうきこん
そのそひ出ハ後ふきこふをむきて

あ〜尼こう 趣 ちふも出ぐよひぬ尼くぐ 漂蕩 ぬがぐ
ゆこ〜ふ 今タ上文 こぬさぐ 宿世 をこうさこ〜ぐ 浅 でぐあ 尼 ふもな
さぐぐねこうたこんもぐ やがて スグニ そのあもひ
出ぐこ〜あ〜こぬ〜こうぐこんやこうく
こをこのこをこ 相 のひこうひこく副 ぐとあこんをこうも。
かこらんきこ 刻 ばみをこぐんすぐここんや
ここぐ ちだこあ 宿 ふこくあこ 縁 ぐあこ〜ぐんこれもくも
うこ〜かあこ〜こんあこ〜ぐやぐ。又なのあふ
キヅカハシウ キガオカレニイモノカ ヨコミチヘ
ふこうこんこんをこうこみこぐこ キモチラミセ
念 うこうあこ
抜 むこんち 背 ぐをこがはこ〜かこあこんぐふこ
モヒタ アホウラシ
ふこうこ〜こ〜こんぐみこあ〜ここうぐこ
アヒハジメタ 今ラ

○十六

悪 ふこ〜こ〜こ〜ぐ
思ひこくもあ
ぬべこ尼ぐよ
メキ 絶 ぐこ〜ぬ尼ぐこ
ぐこの手 オダヤカ ぐこ〜こ 怨 ぐんぐべ尼手をば。
見 知 ぐこ〜こ
こ〜こ カハユラシウ ぐこ〜こ
ここ〜ふこ
ソノ ネザ ニツケテ ぐこ〜ぐ
男ノ我ン ぐこ〜こ 女 ユヱニ 治 ぐこ〜こ
今ハ上ニ ぐこ〜ぐ
一向ニ 放 ぐこ〜こ
カハユラシイ ぐこ〜こ 自 然 ぐこ〜こ
リツナ ぐこ〜こ 不 繋ル ぐこ〜こ

あ尼をこ〜こ〜こ〜こ尼こ〜こ
こ〜こ〜こ〜こ〜こ〜こ〜

ちんぞくさうをぶそくうむるなり
ありをもろく　玉こハ同じくるの二
きおろてゆゆふつれてつくそ水
ちんぞるハんようゝゝゝろくと
うゝむぞうんろハ昭くを人ぎ
ありゝてゝさそ方とそまいる方
とを二ふおているしろく
釈おのろゝハおのろハひ子もと
ろもろあれハ子ゝゝおのろれすし
それよつけくあれもまろぬべし
釈おのろゝゝ子もゝいひぶなつ
けくわよろもあすままろべゝと
ありまさろとろくをつべゝ
ろろ人ゝゝをさまりもべゝ
玉そくゝ女のろへゝらひぶふろう
てゝりをさまろハ絶へうろろ人四
やむをいふ
むげふおのろべんとろちろろも
玉指き流ふふうゝゝぬもうゝが
もゝくぞおふゆるゝるのむんれろ
うゝろべぶこのおのろろとんぶど
ヤのろハうろべゝ
つふぶぬ舟の　河文選鵬鳥賦云
泛乎若不繫之舟　玉い海よ
文選をゝまろろハゝ拾ぶもろてハ

舟のうちに浮る世あるゝとぶふあやたり。
男心ノ定ラヌタトヘ
さそんちゝゝ　サウハゴザラヌカ
あろうくぶろ
人の世ハ　女
大半あるべくまぶ　男
てんすぐさぶさゝなゝ　直
ざゝんぶとおぶろゝれどゝれさもあゝ。
とをかくもあぶふぶきふゝあゝんをのど
やうふみ　見テコラヘル
まぶうゝるぶとひくゝぶいあうとの
まんハぶこのちぶあふかのひゝへうとおゝへバ。
ともかくも云々ヨリ下ノ事ヲ云

ナルホド　ワケガナイ　点　頭　中略句　余事いろ〻

白氏文集の偶吟詩よ無情水住
方圓器不繫舟隨去住風とゝる
をとゝて也ろおりさてぶふあるる
ゝハびかえるかゝてゝ
さ住ゝあるとゝハびぬうあぶく
評當夜のまあをあゝゝる月四
の月ありさてすぶくろぶのとと
ゝうゝうこまでハ女の男ふれてふ忘
おまてをゝう上ふいとくゝをゝく
ねぢけぶまゝ紀ぶえさあぶハ
えくとゝへるハ男の用ふあぶ對て
ようゝまぶゝ先男のろぶんを
まべきよ流ひひく流よ女のあく
ゝらひぶあるとゝへう女の法つで乱
まぶゝていひゝらぶめでゝゝ法
中れのあゝらひの絶とゝてるの色
けあれ女をゝまゝむるぶう
さゝあろくゝろ　釈附あろう
てあゝらぶをゝろゝもあゝれともおりん
人のあぶるゝあゝん大事あるべし
とゝるりげあさうぶひとゝ接
ふ女のゝぶあゝてあへんをゝるまう
のうぶゝくさるあるをゝふとゝれ
るぶどゝ大事ハ俗ふふ月じく
大ぶろあるうとあり

源氏　眠　語　交　モノサビ
ふんのうちに初ふうくことばまぜ流をあをさぶく
博士　モドカシ　批　判
シくくんやゝゝとゝふ馬のくくあのさぶあれ
ぶとなりてぶゝらだあゝう。中將ゝこの
理　竟　アレラヒ
おとゝもう少ゝてんどゝよいれてあへゝらひ
ゝ百段目
ふ方ゝのゝゝたよゝへておぶせ。ま
比
のゝゝれ半ゝみれよゝづの絵をんよまうせて
エ　匠
作　出　臨　時　訳
ぶゝゝいぶすも。ぶんどれりてあそびとの。
物
そのあとゝ。ゝゝもゝぶまゝぬハそぶつゝれぶ
側　シヤレ
ゝゝるゝも。ぶゝふかゝもゝ川べゝゝゝるぶと時よ
ナルホド　為
つけゝくさ流ゝくぶゝゝゝきにめゝゝり
カタナ　タウセイフウ　目　移
てぶゝゝゝとあり。大半とゝくぶとに
オモシロキ

うるもちさく人のでうどれかざりとするさぶ
キツトタバシイ　調　度　飾　定
おれるやうあるあをなんあくちいづることあん。
なほまことのあよく上まぱ殊ことふんえ
わるまを待る。又ものどころよよぶでおかりれどす
こぶ紀よりこぶ撰ぶまてくぶ紀くふぶこにおとり
まさ法ろ勝ぶ差ぢんぷふとうもんろろまぶぷく
までぷ人のあんおよぶぬわうらいの出あ海の
いうまるいを怒魚ものたぶぷ唐ものぶ烈獣
ものかるちぬよんろぬれかれ鬼顔あぶの。
おどろくく驚々作ちるるものぷんよあせ
て。紀ときは人のあ体おど紀りてぶち実ちあ
ダンコシラヘ

うるを抜さち恋をぶしてんぶぶとりあり英上のをむけこまるるひ作り 湖 ちのとあんをるもかりんきぶみ
をもんすぶくさく人中てをとひすぶくよろぶのくすぶくろにあるくいひ一段ふ養くる詞とんるべく
ろぶひのうとのひあるんハろ
男のすねあるくくろ
釈 このさぶを英上のさ母ふふへまハ伊氏ろくさらせちゃんとろろよおれあるて沢を交
ちあを中れのさうぶくくくんやまうくくひうかのさびくきさんやまくくハ起てゆまへうく
とやうふんのくくくさくこのさろろ又尚れのすねをあるくくる身ふ有
あのさぶあれとろをふあるて 新 さらせハ博士ふく博達の学士あり伝れ尽くふも所匠あるをいへどろハ学問の
博士が学生の論を判ア定あるぶごく馬所が定ちるををもくく出て典とするあり
ひぐらぶあるう 玉 俗ふふ口をくくたるくうといふくくと世武初日記ふよろべ一つぶくあるくのまぶるくるあれ
まくふふくきぶ足古ひきさぶくおくあひぐらふくちひぐらうくぶくのまるくろれおどいとくくろばれあるくれるぶぎ
なくうとあるも口ひぐらうハ枕よみを仏あどくちゃめべいひつくるといへうくく
このくくろうゆくてんとうく 釈 このくくくくくとハ上ふもあぶつくへる女のよあれ理をいふあくくらひハ五津
ふ今天くと泥きくれるあどと
ふろべのくくふくくくあぶせ 評 くくようあぶあるる女と実ある女とのげちめをあるくくるくく説出せうまくくくまたち
くべ一本ふくるあるべきを回ぶくくくをこうまで若くくつひよくく実ある女とのげちめをあるくくるくく説出せうまくくくまたち
例のいくくくとりべべくさるハこの実ある女くくの一本うんあ字をのむひとあるくくとあるまべハあるくる
そのあれとあくるもさぶまくぬハ 釈 くくふくる花と平形の字まうるあきぶ花ハあり
そばづきぶれぶく 玉 そバつきハ傍の形あるくつひハ粉つきくまつひぶのはきくくされぶくくハ俗ふちゃまくくるくくふ
くくくくくこまハうまべの肌ふあきあるけぶちくくまくくくくく

一日ちうにいたるまであるいてまたハうちをくぐらんやうあるものといへ
ハむりとうにすまうこと故実のやうあるものといつさとすやれバさてふ人のとゝまらひてハさらさらとうぬこちたく
さはることなれとそれ作る　抵　うるりをさ人のでうどのうぢりそバ人の品あるべしといそるべき女のこふさとく
いつかり　釈　世俗のすべてのさハ俗世の弊ものどハざれぞみるもいまわるくてをうをさもありさんどと大学と
して放実ある先人の風俗のうぢりとする物あるをを物あるをを物あるをを物あるをを物あるをを物あるをを物あるをを物
やうふハんえるるものとのさを女のうへとをとへくをうるべ
うるべをまどゝのこうてうるれ来をゝせん人ハ実あるべでハるのふをうをれたうをいへるも
をどゝろ　河　西宮抄云畫所在式乾門内東腋御書所南有別當五位藏人預云云
をみゝをはよをゝぐれて　玉　彩色をするるのふ射へくゝで絵をかくとをいへる名目ゝ古ハ絵をうはて彩色をバぢ
ふ他人ふをするるのをうるるふ三つふるて墨ゝをはて彩色絵といつてうるるとハ彩色をるをつゝ墨絵彩色絵と
いつとゝふあゝ也ゝうゝ　釈　ゝうゝぐれての下まかくまとつゝ
はべきよゝいゝれゝまゝどつゝうゝふハまきうおとゝ流をまきゝていへる流あまきハさいまゝうゝうゝ
やうゝらいの山　餘　列子湯問篇曰渤海之東不知幾億万里有大壑焉云々其中有五山焉一曰岱輿二曰員嶠三曰
方壺四曰瀛洲五曰蓬萊其山高下周旋三万里其頂平處九千里山之中間相去七万里以為隣居云々下裏
あゝうゝこのいゝるゝいをゝ　餘　鯨鯢
おふのうほ　細　後漢書張衡傳云畫工恶図天馬而好作鬼魅誠以実事難形而虚偽不窮也　新　韓子云客有為齊王
畫者齊王問曰畫孰最難者曰犬馬難孰易者曰鬼魅最易夫犬馬人所知也旦暮罄於前不可類之故難鬼神無形者不
罄於前故易之也
ゝくゝふふぬのゝくゝさ　玉　ゝくゝふふぬゝ峡嵋ゝぬゝといへる流ゝふゝ
よゝがれゝくゝみゝ　湖　世をゝふまゝゝふゝ　釈　山ハ峡嵋ゝぬゝといへる流ゝふゝ
ゝゝぐゝゝはまゝぐゝのゝち　湖　氣近さゝ　細　前栽をいゝゝ
ゝゝちゝゝひ　拾　有意　日本紀第廿八天武紀上　釈　ゝゝひハあゝゝひゝのゝひと同ゝき辞ゝ俗ふんゝちゝいふゝさゝ
体云ゝゝおきゝも併云ゝゝ
ゝゝゝおハゝゝゝぬ所ゝゝゝ　釈　このゝゝゝも又人の目をゝゝゝゝ方をゝゝゝゝ

出てもべてハ平とこの眼ニの何ゐる
こをよくゝ心ゑてよむべし
さてゝの心ゑすぐふかくして作れゝ
釈さてゝの心ゑ事ハ上件ニのまもと云
こゝふゝりてつひゝ実ふうべきよ
しをとゝゝゝゝゝゝゝゝ
そのそゝのゝ　釈ゝ以ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もうさくておのづから人をきまるやうなる手本教のぬ身をかくまでもとうんとんどうしきんもありてうぶぐるをきあらうをもうのあり玉箒補きふ作ふうさけれどおどろかべーとよれどかくてきこゆるあり

教あるぬ身を 細いまだ安き法くて年もまうとあるをばいたてもかなまでいれこてやうーあるするぞとあり

やはいくしぐうるるかも

湖うるのいくしぬるかもあるてをいぐー 玉おのがえせぬ及びぬまでをさ人見まもでとーひてきるさあり

さてあるうること 玉さるるるるこ

釈進める方おてまかうちあるをを出ーくるひとげむをどうとくるありまくやることあるかはるーとるくふあびさそあるびん

玉はは女のるるふあびくし 釈あびるは徒ふさあるうあるびゆるいかのおるらるふあるうゆくをるふ氏人ふみやうとまぬんと

釈此人ハ馬頭をふ女の方をうとしそいふあるかふびんとふいくし女のるるふ法ままんうとるそうちをけくるふうし

うとるるくふるたくハ他人をいかるるくちを他人ふるんれるばるるびるそぶせるやおりるんと女のるるくかるれるどするさしおりてあせなちくる見すて面目あーといるさあり

新白氏文集ふ外人不見見應笑 玉佑るるくるあるひとるさふて容色のくるし

釈この前後ふ脱文あるべくおるきらでハ女とるるふとのるらるあるーるくうるるるてとあるハ女さるるーまるふとるるハるるふの女をるれるし

釈ひあるるまふんも異ーるあーざるしるどーふ嫉妬ひるるふるるるざるーとるかるるとハ嫉妬のーるどるるーるるるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みぎてをゝく 抵注 上の件きまつて
人うずまるようやと 釈 安信進ミ
て人がゆゝき時をもあゝんうと待
うさハとうゝ
のどくふそびあさまて 玉 せ方の
末ハさのゝ 玉 せべて比羽ハうふ
あいのおごのゝハ
あゝんもちうゝ紀仍末のゝをゝの
ちうぐゝゝくゝ
ちうぐゝゝくゝ 玉 ころゝをを
うゝて そひゝふさゝくゝ
えをきゝぬすぢゆて 釈 せり嫌
妬の後ハえこゝくぬ像ゝてく
およびひとつを 新 和名抄指由
比俗云於与比きて ちの指ゝ ふ位の
於与比とうひゝてふ李指古於与比と
きゝゝハ於て指をおよびとハゆゝ
まゝらひを 湖 朝廷の文ゝ
ちうゝめゝふめるつゝき位
玉 上ふゝゝぐてゝ
をこゝくと女のいゝふあゝていゝ
釈 この位いゝゝゝゆゝし位の下ゝ字
の流ゝゝゝゝいゝゝゝゝハ安位の流紀
ゝ 融ゝえつけをいゝゝゝハ安位の流紀
くんハくゝゝゝくゝくゝのゝゝゝ

ちゝゝゝゝゝく 馬頭毛 ゝ
いひゝゝゝ 励
ゆゝく。および 指
ゝゝゝ 一 間 引 寄 カミツキ
きぶてさへつ 瘢 デ
べ紀ゝゝゝゝ
くゝゝゝ 位 ヒトシホ 餘 ゝゝゝ
せをゝゝ 背
どゝゝく 嫌
ゝのゝよびを カノ 合ミツカレ 指 屈 カヘリ
ゝをゝてあひんゝ 俞

ゝ ギャウ サンニ ウラミ
ゝ 世間 ツキアヒ
ゝ 唇 官
ゝ 今日
ゝ

せをゝゝゝゝ
釈 道世ゝゝ
ゝのゝゝゝ
かのゝゝゝゝ
を痛ゝゝゝ
ていゝゝゝ
ゝゝゝ
てをゝゝゝ
釈 波月おゝ文字ハゝゝゝ
てといゝゝゝ
いゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

とる袋のいへく　あふぎもさしがふるゆ〜くゝりて　あきるゝこの頃も袋ハいらぬく列ふいへ〜

うれゆ〜をゝ〜　釈　みうらのゆ〜ハ上の句ハ君ぞうらのゆ〜ハ袋ゆ〜といへるゆつ袋ゆ〜部てて袋ゆあぞ〜しきをゝらゆ〜

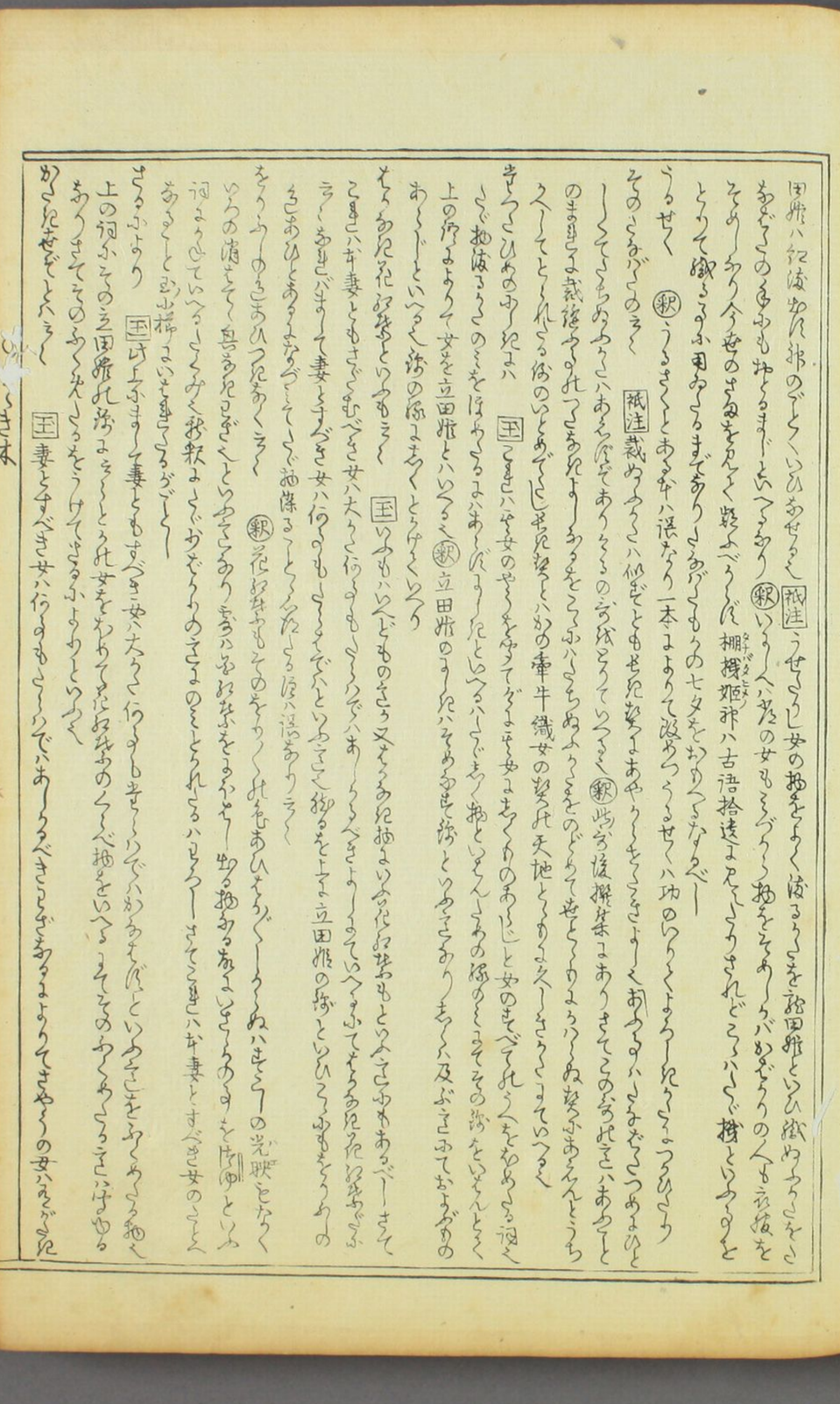
とゝのつ〜ゆ〜ゆきそのあぞ〜しきゝうゝをこぞ　ゆゝらひ

ふハ上の句ふゝをふまハとゝゆまゝうく一つ二つとゝく〜ゆ　ゆゝらひゝゆ〜ゆゝ〜ゆ〜といへるゝ下句ハもゝて人ゆゝゝふゝの

ゆふゝゝうてつゆゝまゆゝ列ゝぎゆゆゝふゝゆゝゝゆゝゝゆゝ

あるてゐるさ。ぞ。訓おんを付べし
ひるやごろふ 国 ゐ後ふ 直隠
とある字のごとく伝のゐることもすくなしもあるそのかとゐることもあるべしひるすゐるく
るゐやうのさへやとゐるりと
ゐるよるる云ゐて夜のさより出
ゐる云ゐ
ゐるとうとうやと 国 ゐハるゐ我
ありゐるゐゐとゐをゐるゐるや
とゐるゐるゐをゐ女のゐるとゐるゐハ
ひるゐるゐるゐゐるゐとゐるゐるゐ
づゐるゐをやゐるれハり偽よゐゐを
ゐゐる男のゐるゐるりているでう
とゐるゐるゐとゐれゐるゐるゐひるゐるゐやとい
ゐるゐるゐるゐゐるゐるゐるゐるゐゐ
ゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐ
ゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐ
ゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐるゐる

あふ件くといへるうゝ　新　拾遺集平貞文川よせバこゞよハよらでまろ船のつるびきするそなハらゝとまくらのおをうていろ
そひあげをてこゝ　釈　女のそひ物きてそのおりひてつひこゝ引まくりうゝ
ゝうられうゝ　新　さうられのまゝとゝ
ゝうて鬼さむろといふぬくらゝ
さんのとろゞとふるそゝひあくれ
るあり古今集ニ「ありぬやとゝろ
ゝゞゝゝあひんひばゝうれおくに
まゞゞ忘ゝゝをを捨ゞて引ぬう
さゞゝうゝてあぬゞく
玉　ゝ上をゝゝ人ゝゝもゝのまゝて
ゝうゝんとゝ
ゝゝるにあゞてゝをもゝ
釈　あゞゝハあゞゝゝゝゝゝて
ゝゝとあゝゝゝあぬ馬ゞゝま
ゝゝのちゝハ公私ゝゝけゝる緊要の
事をいふ
事ゝゝ雅とゝんおも　新　立田彦立田雅の二神ハ馬の神ゝて女ハ織姫
あゞのゝハあゝねゞ叶立田山ハ紫
のゝにより　古今集ハ摂津国あゞ
小ゝゝく住ふよりてゝ後ハ立



田雅ハ紀淑望に雅のごとくいひあせるゝ　祇注　うせるし女のあををよく淑るゝを立田雅といひ織めゝゝを
あゞゝこのゝゝもゝゝゝるまゞゝといへゝゝ　釈　いゝゝへハ彦の女もゝゝゝゝ扨をゝゝゝゝバめゝゝのゝ人も云後を
ゝゝゝゝ今世のゝゝゝをゝゝく数ふゞゝゝ　棚機姫神ハ古語拾遺よりゝゝゝゝゝ

世平まて定めりとうとうとうとう
いひとやーーーーー 潮 ーーーー

大納言殿家よりまいりたりしんとすると。
この人はいかなるやうにかとひとへまつらんやど
なんあやしくきんぐるるとてこの女は家
待　殿上人　ヒョウナ　キニカヽル
もちるよりはぬみちのかたもだあれくるく
モミタ　ヨケラレヌ　湖　女の家は木枯荒れのままに　荒　頼
づまよりかたのかげんてくるるすこうぬ
影　宿
るすこうぬ。もとよりかさるんをとうせる
トホリコサン　元　来　通
みやあつてかどちらはられたるこのこぶろ
廊　殿上人　ハイヤリミ　簀子　メク　尻
門
うきてとうるるをとうるるいとはず
移　アラソヒテ散ルサマニ
ろくうんはひわらうて。風はきほへ

湖はうへ人木枯の女よりをとをあ
ずあるはあるもこばしくたはのあ
はこそうんとするはの女のあるさ
さくとつくはのそこびく
よきぬは　註　なにはこそはあはけと
つはまはこ古今はのあくをよ
きてふけるはのよはをを曲道と
なげかさく
あれるくれよりはの水はげれて
釈　築地のあるくづれよりはの
はのくよ月のやどまるあんはる
さくるをあやかてうけるく
月ぐよやるすくをを
河　拾遺集　伊勢　あるあひくさ
ちはは月ぐはもはどやとすぎて
ゆ　湖　月さへやどるすこ
をを男のやどくてもきはぶるを
ぐくとのくを
かりはぬう　釈　上は脱文あるを
まやこの車よりかりくちへの自他
まぐくりくちくく上のはぐ
きくてとあるをはうをはけうはは
とんて後上人のはくちはうはは
万水一をはあるはは
かくはうくさるはをうとせるあや

湖はうへ人木枯の女よりをとをあ
ずあるはあるもこばしくたはのあ
はこそうんとするはの女のあるさ
さくとつくはのそこびく
よきぬは　註　なにはこそはあはけと
つはまはこ古今はのあくをよ
きてふけるはのよはをを曲道と
なげかさく
あれるくれよりはの水はげれて
釈　築地のあるくづれよりはの
はのくよ月のやどまるあんはる
さくるをあやかてうけるく
月ぐよやるすくをを
河　拾遺集　伊勢　あるあひくさ
ちはは月ぐはもはどやとすぎて
ゆ　湖　月さへやどるすこ
をを男のやどくてもきはぶるを
ぐくとのくを
かりはぬう　釈　上は脱文あるを
まやこの車よりかりくちへの自他
まぐくりくちくく上のはぐ
きくてとあるをはうをはけうはは
とんて後上人のはくちはうはは
万水一をはあるはは
かくはうくさるはをうとせるあや

○さくき本

みみぢのこぶれおどあはとぶはえ
こゑぬとこはれりるふえをはいでく
懐　笛
ふはあくかげもよくなどはぐこま
うはうはどふよくくあるはぶんをはくべ
ウナ　鳴　和琴　調
とくのくはとはうるをはくくはあは
ヨテ　キウ　ホシ　ドヨ　ニク　ヒキ
せくくはどふくはあくはは。はは
異　律
のはくくべはは。女はあはくくはよはくて。
調子　柔　撥　鳴
さのうはくはくはくはくはくはくはは
簾　内　タウセイフウナル
あはくはあはくはくはくはくはくはは
音　清　澄　時
つはなくくはくはくはくはくはくはは
フツカフナラズ　殿上人　感　簾
もはくはくはくはくはくはくはくはは
歩　来

ぞふふみたるあとをまぢかくおもふ。（踏 跡 分 イカサマ）

ゆかしきかぎりなきものは、菊の花をわく。（菊 ネンガラス）

後上人琴

ひとのもとにまかりたるに、琴のをしまれてひきやとめたるをとりあつめ（ヒトヘホリナラヌ 留 琴ノ縁）

つまをあだしこのみたるをいとはしがりて、琴をひきやとめたるをとりあつめ（ナニトモナイ）

あるがいひくぬまひとあつまりきてあそびきく。（聞 栄）

人のなくなりたるよ。まのこいのひとなどいとあはれなること。（莫 遺）

いとくあざれうまだ女おういさうたく。（シヤ）

ろひく。

女

あづまよ吹あはれなる笛のまをとひき（風ノ縁 琴縁）

とぶむべたることのちぞなきと。あまあれ（琴ヲ兼 ジヤラヅキ）

杜

かたちよ。おとなるをとをきくでゆさう（筝 ア フ 馬頭が心三）

ちくべとのべくうるを

王 うとてうく調をあはせをきさ

るをくりこれをかひくとして

ハトのうたがはせをとかみを

ありまとめくといふをもいぶく

うさあはせてうしかど

釈 琴を掻ひきて笛ふきあはせる

くうくうあぶハあやうくむつき

づきしきさく

アちらのちくべハ 細 乾ちは律の

おく律ハ秋を司る 又律ハ陰な

ほ女のうくこ 時をたがみ月あれ

バをうるあつるあるべし 釈 この比

況さをまべ多まで陰陽のさぐま

でいあくぎるべしぐ律の調をを

女のやくうるあるまふたあるしる

ちの巻のうちとうゆをうるが

今めたるさるあるべし

水の行ちをとを 河 秋はきぬめこ

ぢをやどふありちきぬ乃ゆみ

ちけてとふ人ハ赤 ちの集

うく人武女をマ乃ぶ妻とふをてね

どもいさまるふち武女ふ人のうふ

とゆていくるく 釈 夜のおちをよ渉

かうう辺ありて人の来ようをな

あうとふうをを却てなうとふひ

て友をきうせてくちをうしく

ちるさく

祝ゆまりもの 王 祝ゆまりもむく

総角をふもべてやハあど祝ゆまほ

ゆまれバ性性をふあどくねゆま

しがふたあしまあもも

菊を折て

釈 後上人あるの菊

を折りてうるもくさうひと

ちくるく

ことのるもう 釈 一そのさハ

かゆうひくぬのるもさたるる実の

ちもしでおるをとうでくたあるく

ゆうひくうるめくうハるぐと

くたのしなもあたを引とあくる

ひさて迷惑ありめとふさるる

くふうるうるえめうとふとをを

へくいくうしうるうめりハ女のくよ

うるくうるあべしとふさめ

とふ詩よんを付べ一年ふ月も

えあるぬとあるハ来をおてとふ

るふるあたを菊のるをとたいう

渚注ゆをるねたられるハを

ゆくくとふ詩の紫をまりべ

今一あるきくるあたべきくのうく

のふとをを盤 渉 調 琴

めうくくひきくるたるおとかどるあたハ（タウ 爪 音 オ）

あくあどぬまあどたんちなんし待うし。（セイフウニ ウルサキ）

ちぐとたぐくうちくうらふあづくへく（ホウコツニン）

あどのあくまでざれだみをたるハさても（タノテニガヒナラズク シヤレ 好色）

みるうだたわハをうくまるぬべしぬく（アヒダ オ モシロク）

ふてもさるる来るくうるすきぬよたどを思（ヒダ 忘 タヨリドコロ）

ひうへんまうハうのあのあぎれくさしすぐい（アタノミニガヒナラズク 出 スギ）

くとんおうまてうたれ秋のうふとつ（キガオカレ カコツケ）

くてうたてゆうまくうしうこのふふ（絶）

の来をゆうたハ行へあくるふうとたた時の（カンガ クラベル）

釈 あるうも今一段ゆゑ人の
ある時ハ稀世のものとのこされしく
きぜゑへとりひくあぐれくるし
蒼注まこと秋萩玉の緒とあふこれ
を後上人のこゝろ〻れすとせれさ
るいみしきひがゝし
あるいさうつくろひて 釈 今一声
ゆゑ人のある時あるいつをゆ
て女まうとあるくこゝゆゝくろひ
して分をよむこゝ事のくゝきゝ
ひやるべし
本ゞ〻〻〻〻〻〻 玉 は後上人をこ
よひとまうべくりとめん何もあり
とく本抜ふこゝむべゝ抜もなし
といふ何のもゝそこ 釈 一そのさ
ハ本をうゝもゝばうり列つき風ふ吹
あいゝやる留のゝあるきハ本ゝふの
でくくそうあるきゝゝ抜ゝてハひき
とゞむべきとうあり一とゝひて詠ふ
ゝふひゝ琴をゝゝ留を後上人よ
していつるこきるいゝく物ひく
あゞれゝゝふゝ人てもゝうゝゝひゝ
ゞ仕ゝゝひて引ゝゝむべきやゝゝも
あゝ〻〻とゝるきゝ蒼注ゝも例
のいゝゝあり 新 あふふゝゝ抜ロ

ゝゝゝふなのかきやうにあていぐゝゝ抜
こゝゆゝぱいとあやゝゝくゝあれもゝゝゞゝるゝく
ゝゝゝんゝ待ゝき。今よゝのゝゝゝゝゝて
ゝのゝこゝなんゝゝひ抜へゝらゞゞきゝ。ゝんのゝまく
ゝゝゝゝゝ

いづくよ　国いづくにかしてもし
おいたちうん　細おそくまんあり
をまこのの〜あはをを　国ふかのうへ
ふろ〜ゝをを早下してかくハいるゝ
釈これのハ愚あるこまて俗ちふさ
ゝけものといふさゝ
あぐらゝ〜きものとも
釈あぐ〜ふ永く月日を経るさゝ
月日永くあハれんのもそハぎう
しゝどゝ
さえぐ　湖絶〜あぐ〜といふゝ
うゝめ〜とろすも　釈女のすれ
を深ふすふつけてハどゝえふ
をりあぐハう〜め〜とろすもあ
らんとせおのちいうて見ゆゝ
ら〜らぬやうて　湖とゞえのつ
さをもれ〜らぬやうかても
さやそうあゝくも　釈中ねをかく
ぎまもろかゝふ人のゞとくふも思
らぬさあゝ
あてつけ〜んをふふて
国ふふ根りくそいあぐつ〜ミ
てやをを原ざゞやうまれもち
ら〜〜さるをふんゞ〜さん釈夕
よハいつもくのさゝ

あやまらし〜てぷん人のゝあかゝれ
名をもぷぎてつべたものなのぷとい
中ねまこいのうれづく。ゝすゝ〜ゝこゝ
さゝゝとゝハおぼまべうめりいづくゝ
つあてもぷ人わゝくもゝゝあゝりゝる法
抽根ゝるぷ。ゝゝくゝちゝ〜ひおゝきゝうだ。
中ねぷなゝあぐ〜ぷ。まゝめのあぐゝゝををん
とゝく　いとをものびくみゝゝめゝゝ〜ゝ人の。
さてもんつべゝしゝふひあゝ〜ゝば。
ゝくなぐゝふべたものゝ。ぷひまへざ
ぷ〜ゝどぷ。ぷまあくまにあゝれとおぼ

（男　立　点頭　源氏　笑　添氏物片　チラ　ドド　見始　女　形容　狂　剛　白癡　モットモナー　ザマワルク　フツガフナ　カナリニミラレルホドノ　永　バタ　カチ　警）

えゝうぼぷ〜ゝぐ〜わすゝきぬものゝふひまへ
〜をぷぢぐゝうふなゝまぐぷ。ゝちゝまものあるを
ちゝゝもんゝゝゝ。ゝゝのむまゝつゝゝあて。ゝゝゝあ
〜とゝゝまもあ〜んとゝんゝあぐゝゝゝまぐゝゆ
れをゝくゝゝ待ゝ〜ぷん〜ゝゝぬゝゝ
ゝゝく。ひゝゝ〜ゝたゝぐゝんをゝ。かゝ〜ゝあゝゝ
ゝるゝ人ゝゝゝを思ひゝゝ〜ぐ。ゝぐあゝゆゝ
ゝてつをゝゝゝ〜ゝんゝゝゝあゝゝみゝゝく。ぷ
ぐゝゝゝゝ。ゝゝのゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝれゝ〜。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝてゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

（志　モ中務ノ　憑　八　中務　如此　カヨフ間ノ絶ルコト　テアラズ　イツモ　シバウシ　ドクナリシ　タノンセ　父母　中務　義ダイ〜キ人十七　觸）

いさや　鮎　いさは同じ

[玉]源氏君のやうげは同のふつく
いおとさきて作ちもべさがのす
もかたりくのとく

山がつのさく　(釈)山がつの垣かいかこの幼児の
を身下してさとまでこハ幼児の
うふさとくさて我ふハん涙く
あるのかもはるはあれをうげ
あくといささくおといつはみと
いの間の隠ぶさまさてんの
見ひ出しまに　(釈)おをおをそ
まうて中れのやひ出れわと
むのひふきかへうそ

[玉]さのあくふおそぎきひく
ものそふそきく

むしの物ちて　(釈)苔物の
さうふ結あふ結けてうそう
そきよく似てちがそとい
ある回況ひぐとそ
さそまぐくく　(釈)今この歌載
は源すぐさてあるハいづれぞと
ともころひどもれやうこそ
及ぶものかといそあくきあの
らうそといづれとぬあうあか

あるうきを。からうげあうた。のう
のどうたよ杉ぐうて。ひさしくまうう
ユルヤカナ　コヽロヤスク
ざうしうつ。あのるんるるわうよう。な
四君アタリヨリ
ちけあくうて。のる事をのんさるうより
情　ヒヨントゲナル　便
あうくうすんいそせるうくるはふうて
ツライコトガアラウ　今事心
ゆ。結うしふさるうたことやあくんとも志
らびんまハるすれぞあぐうせうてこあども
オトツン
せで。ひさしく待うふむげよ忘ひちを
一向ニ　湖むぐく
きくんびううれば。をさるたのあど
甲　幼　児
もはうしふ。ゆもひわづくひく。おぐうこれ
コナマヤリミ　五　躍　麥
たれをうておをせうし。とて涙ぐみうう。
折　中掛身

源氏君
さてそのふれことぐう。とひまへバ。いさ
詞　イカニ　イヤ
やうあうこもなうきや。
モウカクベツ
女
山がつのうたあるもをわくに
荒
あれそうけよあぐうこの歌。ひいぐ
愛嬢　露ノ縁
まふまうしうしうば。きいのうもあさ
例　オクソコモナキ
あのうう。あまうる家れ。嬉しぎよ成
荒
なぐあ。むしのひよきへうる。
虫　音　競
むう物めたくおぐうん待うし。
形中ノ
さたまぐうたていづれとうひぐん杉
分　ヤバリ
とうあ川よ。ちくあぐのたやとなぐうこ
床ノ縁
をバさう物てゆづうをぐふとおやのんを
先　母

ゆゝしき。

女 うちもらふ神もあるべきことなれよ（夏ニ添フ秋トイヒテナシタリ）

あゝ吹こうふ秋をきまるわびとなれ（十二トモナゲ）

ぶたいひあゝくまあゝ（ジツニ）くうみ

くゝまゆもんてびあみぶをあしはて（漏）

てもいとまづうくはまゝげふまだら

ちてつれをもゐひまうるわと（ツレナキ）

ふんこん八月（メツタニ）ありあくくまさはとゆひ（苦）

（中将三）くゝうぶんやまくくまゆぶこん（再）

おき待うしうぶにあもなくこてうに（アヒダ）（跡）

うちくうせみうまぶ世ふあうバまちう（消）（ラチモ）（亡）

流 落 なに世ぶぞさうらはあれとゐひ

しぶにまうちまげふゐひまちに（ウチ）（ジブン）（ムコ）（ツメ）（カダツ）（サウゲ）（イビ）

やうきんまうバかくもあくぐさ（ウス）

ばくまゝ。かくよあれとぶこゐはうぶさる（カクベツ）（中絶）（サウオウナモノ）

よ為成れこのからうくはりしぶ。（カハユラシク）

うれなぶぐくんるやうもはりまゝ。

いくでぶぶんとゐひまふをゑふこて（ドウゾシテ）

ゆつけはゝねおまこうのさまひはふ

ちうれさゝあゝなれはまなくて（女ノ）（ナニゲナイフウデ）

つゝとゐひるをもゝでゐあれこえ（ツレナイ）

ざゝゝとゆやくあにうされゆひあうを。（益）（片）（思）

いぶあんさてハかぶくふゐ俗流

めさてはもれ考ふべ

ゐぶうりげはゐひまちにくき

顕とぶをいと痩ぶてうひふ

まふまゐにれれおもいひぶぶ世を

ぬのぶうさゐのあぶくまあて

とゝべきうとゝ釋一ハふゐひまを。

にとあうあてハゐぶうりげよ

らしふあのはあうゝてあるう

をゐせさうあはまあうまう

ふあつうくいひくゆを惑ぶれけ

しきをけあのにさバとゆさて

あるべゝゐぶうりげゆとゐれゐ方

ふうあへるやうゝ考ふべ

くもあぐゝさぐゝまゝ

湖 うやうふうれ如ゐやうふゐを

まゝぐにとゝ

さるものふゐあゝて 湖 ゆ世むか

らぶとも又一方のゆ方ゆもぶぶ

られけをのゐひつる

湖 ゐうふあゝていへる頃ゝえん

ゐあもちぢてうゝみいべきう

をもんもゝぬさゐふきのびく

あどいひゝうゝ

あれれさえぶうひも 国 絶ざゝひ

○さうき本

もとゆてとぎやうかゝげも
やまでゞ物ゝぞ上の文ふたゝ
ごとくかまうせて後までもあ
れとそゝと絶ざるとゝ
下ふゝうやりゝちまあくきな
とあるをもゝぞゝ
やくふさゝゝそゝひ 玉られ
をゞふゝく恨ゝてかれうせあ
わどの女を出方ふ物語ぞあ
まとやふられも行ものとゆの
ありゝゝと一枝の行名ふく
とていつる詞ゝ次のゝふうまゞさ
えもゝゝことあるをもて実ふ
月ゝひとゆふゝあゝぞることを
もゝぞゝ
人やうあゝぞ 雅訳 あゝうゝ
人のゝゝぬるをいふ
ものゝぞゝ 河 後ゆ物ひの
まゆゝあゝばいとかくもゝひゝられ
ざゝゝ 反撰千思千腸熱ツ
念一心焦遊仙窟 釈 この後ハ影像
のゝゝ中ゝを心ひをれぞおのれと
焦 焦るゝまでゝあゝ夕べもあんと
えゝゝうつすゝ 玉 ゝまつ男の
女をゝまゝゝ上ふゝゝゝゝる女の

今やうゝ
ソロク
忘
ゝ思ひすれゆくきそふかれたゝえ
ジブン 女ハ一タ
ゝ思ひ離るゝまぞぞ。をりゝゝ人やゆ
ワガコヽロ
らぶでむ(我ヲ)ゝゝ
カラ心
焦
ゝぞゝゝゆゝべもゝゝんとあゝぞえ
タ
待ゝぞゝまゝゝあんえゝ(男ノ)ツヾクゝまゝゝくゝたのゝ
ぞゝあゝゝゝゝゝゝる。ゝゝゝゝゝゝ(ナホ申ネ羽ノ)ゝゝゝゝ(指クヒシ女)ゝゝ
ものゝゝゝひいでゝゝゝゝゝゝ

伝へんといへど。頭の黒まめやくにおそ
とせあるへだもあるの手をやうやうさんと
ゝひあぐうちそよ（今ハ思出テ云ヤウ）まぐ久家のちやうに
伝へ〜〜。なんぢ女の生とん〜をるん
見給へ〜〜。かのこるぶれまうし給へるやうふ
わたやもすごとともいひあさせ。わるくし
ざまの世ふすやうぶたんおきてをとひ
めぐ〜さんうとせいうりゆうくばえれ
きそ。なまくれたうせとびりくすべ
てくちあうたぶくるん伝へぎわし。
うきはあるもをのあとふがくとん

（遅）（執）（賢）（公）（事）（住）（捉）（私）（達）（深）（ガノモン）（惣）（ホド）（ナマナカ）（博士）（閑）（口）（或）（詳）（学）（文）

まやこのちゝとそ越バ世界のようす
釈ことゝ云様を合わせて上のうたを
結びさるこゝてやハいひすてのやゝそ
歌意のあくせ中やゝこゝとぞたて
ゝ後さうう
こゝかくぞとうぐゝふ　玉こゝをを
とうそ見てもられをこうそ見ても
どふかくふ様ありてゝあるるひが
ゝ見ゝこゝ　釈かくぞのゝ一年ふ刻
とあるハ結びのべきふゝあバゝ
べぐゝ一ハ並べ比べゝ定めゝ見
ゝくかゝてもべきの様也程ゝ
ぬこゝちゝ程若ゝべ
こあゝこゝぐれゝ見ゝぐゝ中をゝ
のゝ見ゝのゝ家物ゝ様ゝ御ゝる中
のゝ見ゝのゝぐゝを一人ゝ具ゝく経
むべゝゝをまぜぬ人ハ行ぎゝ
あゝんゝゝ紙月ゝ所ゝ法ゝ所ゝの
神ゝこれゝゝもゝ経ゝくゝゝゝハ
ゝくもあるゝゝといゝるゝ尾ゝり
ゝといゝるゝゝゝゝゝゝひ種ゝの
ゝゝて独の様ゝゝゝゝ
古祥天女を　湖帝釈のゝゝ瑞
厳の天女ゝ最勝王経ゝゝ　玉霊
異記ゝ聖武天皇ゝ

のゝゝくゝ和泉国の血淳の上山寺ゝ古祥天女の像ゝ
かゝるゝハゝりゝるゝゝゝゝゝ古祥天女ゝん釈ゝゝ
ゝゝげゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　釈法氣俳之法ハ仏法の験の方ふゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

置酒満玉壺四座且勿飲聽我歌高途富家女易嫁嫁早輕其人貧家女難嫁嫁晩孝姑聞君欲娶婦要婦意如何 玉これハ情士の女夫ありのみふようて式アまいきさせてるこ 評情士といふりめくるぶくいくを臣

○ちきき本

なたくしくふくのはうくあををけ

釋 この情白氏文集秦中吟十首のひとつ〳〵議婚と題そう 主人曾司媒人息女

かづ〳〵 釋 拘りてきこの父が情士がんを拘りて結ぶてもせびめ〳〵そうるるびるこ

いくあられるひう〳〵ふこ〳〵 釋 う〳〵ふこハ用云こ女の式アをあられるひく結むるこ様あめう〳〵ひい

夫婦とのひ〳〵さるおのうさ〳〵ひくさやもとのあさこ

いときうげくこう 釋 消とみやも

いときうげよくいの情拘こ 玉 慢よ

をちぐ人むこ〳〵ちあるあ〳〵ふるをこ云

うぐく〳〵ひあう〳〵 釋 天牘休

のみ手ふこ〳〵ろあをて出ていこ

その老をとけ〳〵て 釋 牛女を師

とうてみまをあひ〳〵こ彼のうぎ

とをこうあ〳〵くうちあはさぬし

う〳〵もれぶ〳〵人今も猫をれおをと

いつこく用ゆこあこ卑下の約こ

いまふその老へ 釋 これもこめき

こうすぢこていふ

あう〳〵さいこと 玉 こ出ていハ

ぶ〳〵妻のみをいつ食人等の句

小世界をいとふ心の全本こやく

といくもれふハ本あをこ本本こ

いてこと同じ新のうこ

あまうこうなこん 玉 あまう人上よ

なこう〳〵作るこてぽうわかよひ〳〵わどふある

じのむすめ 息女 主

あたつのぢにいひよりく待〳〵をおやきく

作こてぽさうづたをもく出てぽ我ぶふこ

のみちうこ 歌 途 盃 両

作こ〳〵ぽをき〳〵うちとけてもまろ

ら〳〵ぽかのむ 親 聽 アンマリ

ふかづ〳〵ひ待こ〳〵どよぽとあこれよ

モノ 拘 父 悼 サウハイフ 女式ウ

思ひこ〳〵ぽ様ぎあのうこ私語ひわも文

のぽこつさ。 学才 著 朝 延 仕

みちくこ〳〵きこ紙をちくこぽときこよ

道々 消 息 教 リッ

ぽよぽこ〳〵ふもかんをといあの

書 交 モットモラシク 得 絶 女 假字

ふおのぽこ〳〵うぽ〳〵くこいひまこ待る

所とこてあ腰折文章

作こ〳〵ぽこ〳〵ぽ様ぎこ習ひ待こ〳〵ぽいまこ

作 恩 忘 憑 無才

これあんハわすま待〳〵ねどあこ〳〵れ

妻 子 行 状 ミラレン

さいとこ〳〵ぽうち中のまんよむざいの人ぽま

ここ〳〵ぽんふこまひなどみえんよぽづ

なこ人こ〳〵ぽくこあ〳〵あまふ同

こ〳〵ぽれこ〳〵ふまひこ

ぽづ〳〵こん 釋 あこ〳〵妻と

このまんが学オあん人のこ〳〵ひまこ

こ〳〵状ぽこ〳〵ぽこんふ人ふぽづ〳〵こ

んのおこ〳〵こ

まのてぽこ〳〵の 釋 あ手ふあを

もてこ〳〵まこ〳〵ぽきあれをあ

かくのぽこ〳〵まこていんやあこ

の手ぽはこ人ふハこいあこ人ふ会こ

こ〳〵あ〳〵こ〳〵ぽこ〳〵

湖 思疲あ女をこ〳〵あ〳〵ロを

こ〳〵こつぽんぽ〳〵ぽこ〳〵こ〳〵め

こ〳〵このあこふこ〳〵ぽ様ぽひ〳〵れぽ

あひこふぽもこ〳〵ぽあれハこいひく

女のオ学ハい〳〵ぬんをふあこ〳〵こ

作こあれハこ為をきこて〳〵むぽ〳〵

玉 ちぐぽのひ〳〵こ〳〵ぽあれハのひ

女ハぽの〳〵学同あぽ〳〵ふあこもあり

ぬぽきあのぽこ〳〵こ〳〵ぽこ〳〵ぽ〳〵ぽ

作こ〳〵ぽこ〳〵ぽ〳〵ぽこ〳〵ぽ〳〵ぽ

ある中〳〵こ〳〵ハ作こ〳〵ハこ〳〵ぽ

こ〳〵ぽんこ〳〵ぽ〳〵ぽ〳〵ぽ

ここのこ〳〵ぽんこ〳〵ぽ〳〵ぽ〳〵ぽ

玉 ぽあこ〳〵ぽこ〳〵ぽこ〳〵ぽ

上ようのでんれんをもてよく考
るふ伝れ一ふ一もあれよりもてこ一ハ
学問をそのなれをいのこ三てきへ
てのさ六世中ゑハ男うてもて一学問
あれりのハ作りくといつてあてまて
女ハ学問ゑてこもあでゑすうあう
んのさ三伝れこふゑあとゑとゑ
(釈)世界ゑいさくまれ一一ものく
たの伝ものでくんれてあべし
あのゑ考ハ伝新ゑのう
のこうそといそゑんこそ (釈)女のす
をいはぎてやこうゑ考ゑのこうれ
ゑをいをせんとて潮一うゑ
ゑハこゑゑくこゑゑのゑこうこ
(釈)すしゑふとハんれゑ一こゑぎ
とゑこうこふをこくこうこれ
あう鼻のあこうをこづこハゑこう
うゑをこれこゑをいこうこ世の俗
伝ゑう
こねのゑこゑゑこうこうこ伝で
(釈)世ゑ世界女のゑこけてすひ世ハ
あこで別ゑう世ゑて情ゑあぎと
べこくこ判ゑこうこゑ拙ぎこと
いらぎてゑあを備てあゑうこ

うこくゑんこそ待りしぎまいて考ぎられ
法世こんこゑまいこ世ハ
法ここうこ法こ伝のゑうはきせ伝ちん。
(ヒガヒナイ)ざちをこどかつんこ法こもぎで
(キニイリ)ゑつきぎ。(宿エン)世ぜのひくこ待ゑあれ
ぎ。(男子ホド)をのこしもなんゑ(仔細ワケモナイ)ゑなれのハ(カヨ)
伝ゑ。とまこうせぎ。(遺)のこうをいきせん
とて。(ゆゆしおだし)ぎくをこかけける女うれと
(誘イロ)ゑこをぎこうこうこ(オモシロ)ゑなれ
ゑこうをこづれこくこうこうゑれ(式部)ゑていと
こうこくまこうこぎこふゑのこをこゑに
(コトノツイデニ)

ゑこ法ちこゑのこ法こ(常)ゑけゑ(居)
こここゑこ(物越)ゑこ待ここ。ゑこゑこ(キムツカシ)ゑれゑのここ
ゑこゑこ(逢)ゑこくこ待ここ。ゑここ(ケブタガラス)ゑこ
ゑここここここゑここゑこ(中絶)ゑこゑこ
ゑここ(カラク)ゑこここゑこゑこ(賢)ゑここ(軽)ゑここ
ゑこゑこゑここゑこゑこ(恐)ゑこここ(道理)ゑこ
ゑこゑこゑここゑこゑこゑこゑこゑこ
ゑここゑこゑこゑこゑこ(風)ゑこ(病)ゑこ(重)ゑこ
きこゑこ(堪)ゑこ(服)ゑここ(極)ゑこ(熟)ゑこ(草)ゑこ(薬)ゑこ
ここここここここここここここ(臭)ゑこ(依)ゑこ(対)ゑこ
こここここここここここここ(面)ゑこ(親)ゑこ(面)ゑこ

(釈)やアゑ
これを拙て女のもゑこゑこ
さこ今俗のゑこもゑこゑこ
スケブタガラスゑこゑこ同じ
まこゑこゑこゑここ (釈)ゑこ
ゑこゑこゑこゑこゑこゑこ
とゑこゑこ
このさこ一人 (釈)浮オあこ女れハ
この宗人と載まていこ
女のここここ
(釈)ここここここここここ道理こも
こここハ伝考こゑの別こて世女の才学
ゑこここ一ゑここここここここ世間の
ゑここここここここここここ悪こ
さこ
ゑここここここここ (釈)ここここ
世ハ男ゑあこてハゑこここゑこゑこ
ゑここ世女ハここゑここここここ
ここここここここここここここ
こここここここここここここ
こここここここここここここ
こ

せうとこ[illegible]もうんかとの和名を
まぜそこのてこそひめてのもの
のひもこそ〳〵しくさりこそ〳〵
さまをことさらふかくもこそ〳〵
此物作すべてかしこの何作者の何
おとれのくそのをそくをもちるをと
くべし
ぐゝねちのさゝやくを
[illegible]和名抄云大蒜本草云葫音胡和名
味辛温除風者也兼名苑云葫名雛
[illegible]大蒜也細 ㊟ 出用のひらがゝひめて
茎を用ゐるなれあるべし ㊟ 細流のぬ
くゝ俗も異名の茎とそこゝろ
さゝ[illegible]拙熟のこゝろ用ゐ草薬と云
ゝ[illegible]や蒜八今ニクといふ掘て効
おかれ草あり
いとこゝろ[illegible]ゝ ㊟ これもきす
くふをぞ〳〵といひこゝろ
きものあこゝろ[illegible]ゝ 湖 [illegible]目
ようゝらびとも
ゆゝあれよ ㊟ あこれおとゝ
る八法[illegible]の雑すをを[illegible]んとい
へゝ[illegible]をあれおをこあれが[illegible]
伝ゝゝハ 国 蒜を拔ゝゝゝゝのも
いとゝそゝんづをゝくゝやそれて伝も

けゝべうんざふ雑事ぐらハぷうけ拔ちゝんぷゝ
然 等
いとあゝ[illegible]ゝきようべくもゝくいひ伝ゝ返答
伝ゝゝハいゝそれ伝ゝんぷゝぐゝけ拔ゝゝぬとそ
唯 義
ゝちゝ出伝ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
詞
この香ゝ失せあん時ゝゝちゝゝ拔へゝとゝゝ高
声
ゝゝいゝゝ伝ゝゝぐゝんをいゝゝゝ。弁リトテ
ゝ出ゝゝハ躊躇ゝゝゝゝふべきふゝ伝ゝねゞ。
ナルホド
ゝゝふそゝれ香ひさへゝそれやゝふゝゝちて添
術
ゝゝもさべなくゝくゝぷけめ伝ゝゝひて。
式部
さゝゝぐふのふゝるまひゝゝゝれゆふゞ拔ゝ
蒜畳
ひゝゝまさそぐせといふゞあゝやゝさゝいゝゝなゝれ

いゝゝぐゝ詞もあゝあゝ
さゝゝゝゝ

いろあることうけぞや　釈いろあることうけうふ恭くひくりとはうぞやと祭やうぐぶひうるこうけはうとつけ
とうふひくりく事お詩てとくいつくく
おひく　玉追てまて行ろう人ふ追うけまくいけうをやうくくく泊ふけ女ちひ出てといてるハひごてとくおひ
てくハうぐうくあうぐでも行ようあまうるとうの行あうをあうぐ豆同のうのあも草茅の考する百
あろうれうく　題花をべてべむうまりくくまてふれ中あんがかくハつもうくくと
をもあうおりてうくうぐうりかにをさびうりやりきぬ中あんがかくハつもうくくと
まびくくとヤせバ　釈をくぐ角くさあ作られバおうろつ
うまうるてまりくくをうくくをくぐ角くさまもをあくくれりさやうのむくうくき女とうんうりかぐんじゃう
おいくくう　玉佐ろよぐんじやくうるといつよくあうくうぐ
よ鬼とをひあうるてまきくめといつく
あくあ　玉泊海よ漢とあるよろくく淡くとすうふてうくみかくむをのあ
くれうあぐくくきくくハ　玉こまもをこめたていのあ
ありぬ　釈下ぬ中て源氏君の中とのあうり茅武紀ぐ下てゆうくく一ヤまハをうくくかくてハ泊流のぐと
く居のさあうくれども居中てハくのさはまうふり代下ぬとりふよ作のべ　評今ちのやとる花一人をもっ乗さ
をくくめくハ月ん人をて蔵くあぐうくくみあべく例のいくぐくく今有のさあをあくうる筆土の陸く
まぐて男も女も　釈これうる女
ぶ泊すてかの才学ぐてもうくくハ男
も女もけあくくとうさまくをくと
うるく
ん世ろくんと　釈あぐをれう
うをみあぐくく人ふれ世ていうぐく
ぐくれんとすうるく
三史 弄 史記　漢書　後漢書
五経 弄 毛詩　礼記　春秋
周易　尚書

湖　ぐあぐまくせくくと
口　疾
くちとくあぐハ待ちきぐとちづくくとやう
静　々
せぐぐ。まぐちあさちくくとあひてぐくくぐと
キョウ　サメイ　虚　言
とくうくうくひうふ。いづくくのけるる女うあるべ
ドコニサヤウノ女ガアラウゾ
おいくくうにおあとくくそむくくひみくくくん
鬼　向　居

むくつくくく

くふつけく。むげふまちがいくらべ。
あーんぬぎとあーんひゃうだねども。すし
もかどあーんん人のみゝもめもとまる
おとぎあんよ地ほうる。さはよくふハ。
まんれをちまうにく。さるまどに中
の如ぬくふ。なるばすだてらにすこあさ
る。あれうて。このうれ学をやらなら
まーうぶと見ゆう。こちよハさもも
ゆもハざーめどれのづくぶハくさ
てるよよくこあされどーつとさびと
くう。あまハどうられ中ゆもおやる

向ニ 達 知 習 学 自然 耳 目 留 サウアル 真字 半 過 真字ヲ 人 ヤハラカ カタク人 サウモ 剛々 ワザトガマシイ 音 讀 上等人

をくーにふるくのをも 新をうれ
古事も対ふまてがひくくふすうに
ゆるうさせるハとろくーびきと
さるのとんてをうふも仮つにし
くんをうくて神ちくとハをう
釈ふのゆうるのをあうてそ
ちう入まてもむてくるべー
すさまーにをうくく 釈ちさ
まーにハ不用ちにくるくふつう
くーに不用ちにをうふくくる
ちくりのーにハいがーくあまだに
さて
くーをびなさけう 釈よみち
けるふの思ふをれば法をちく
ぬすのふくうり又実ふくせぎ
らん人くもりちあくふ釈会ふ
さべーと洋ーくるく
さるきをちふあど 国とすが
ちふくいよ月のせち九日のえん
のことをまづいく
あふめあやめちにもぎりれぬふ
釈いそ足年内せんとすあしく
くいたぎりーさなふ仏のかり列も
おくやひちづくーれぬ時ふうを
よくくてふ子すく 国あやちとは

○そらき本

事ぞうーう。うるすむとふくるのやうて云ふ
まくれ。をうれ。 纏 モシロキ 故事 初
くりくみちくーせ。ちぎまーにをもてめうり
かけうくくそめ 取 入 フョウラシイ イカバシイ
バなさけあーえをぎーん人ハちぬ 情 返 可
おうくむぴるべさせちあどぬ月のせち 二アラウ 然 節 禁中ノ儀式ヘ 會 五日ヘ 節
よいそぎよあるあくぎおにのひやめも 禁中ヘ 朝 ワカチ
思ひちづんられぬよくれらぬ根をひき
うけ。九日のえんよまづくにに詩の人武 九月重陽ヘ 宴 一トホリナラヌ 根 先 難
おあひめぐくしいとりあにをくふ菓の
春城くくちせおどやくれつになさ
ハンジ 会ヘ 暇 ツマラヌ

いとゝあくゝふあそせざるゝでもおのづゝ
（テマドリ）サウナウテモ
ぐゝふほゝよゝもへばをゝくゝとあゝれも。
（ミシカニカガヘバ）オモシロク
あべゝうけゝるゝとゝ我のをゝうゝつゝあく。
（ヒウナツハカズズ）
めゝふもゝほゝゝぬゝあゝどゝをゝゝゝ推量
（留）（ムコト）（毛）
よゝこゝ出ゝるゝゝおゝゝくゝゝゝ

すぐれたるあんあべうりうる。などいふも。（馬頭か）
君をくひとりの法をきる海をぬのうちふ
源氏
おりひつぐけ法ふ。さまてを生きてぐ。（世三廿ぐ女五中三）足
さまてぐる事おく物をひるる。
過
とありぐるる事おく物をひるる。
ヒトシホ
いぐるるたるもいとぐむ。
何方
海依
ハあやしく紀半ども。
ラチモナイ
海
ハあやしく紀半ども。
ムネ心の塞る方ありさ神ふてさ〜ふ菱つぐめるとも〜
せさる出ざるいとさ〜みあり相重光の中る北縁をさふうわとせく事あるさ海よひぐ〜せおくこいとぐハさぐ
〜もむはの方ぐふるるくのあるぐ〜紀をそひいぐ〜いとぐふぐるとりるをつべ〜
いぐ〜ふりるとも〜ふ〜　（釈）思ひの海まちく〜ふ〜ふ〜ふ

もわるくのそれ　釈　くさハ葵上の侍女なり　鈍　他のくるしきあり人のけそひハ葵上のくるしさこそ
るるハ乱雑ふるまひなるべしと
なのつくれたるなりとぞ
釈　平宣ハ宣ぶひくるまのまめやか
ふ様あるなのあるなるべしとうるべを
そつひのさおくそのハひおくべうり
くるあるいひしかし　評　この平宣ハ
の中はかりをとり如ら第一段あり
脈を結ら事つれをつくへ
あるうるうるくれるる　釈　うるし
きハ例の端正なる貌なるべしげんハ
をくのさねをれて此方ふ物ふ
さあり
中納言の君中務　花　中納言の君ハ源氏の須磨へうつろひのをり一夜
之とをうるし人と中つるの君宋
指ふ平ふ源ふあびさて大なの法
くるいろふびをと世そう人と
評　これのくるハ物語の作具なれ
どそれをくわかりせおきて半
をのそうふせぬ平ぶひまうひあり
あつるよるそれるへ　釈　あつるよ
六月のなれて小暑ふうつるにあるべし

よ遠くうくみぎまるる所ものらびぬ。添ふ　氣　貴
てそそかのくれすてぐくとういでて。　馬頭中将ナドヽ
まめぐるへよ事のまれぬべくまと　憑
ううあすまうるうれたるのさ侍のとけ　キツトシタ　ウチトケ
ぐくもづうげまのこそひまげまう　バカリ
まくるなけうぐくくゆ納言の君中　モノサビシクくくゆ　葵上ノ女房
勢あどやうれ。おるべうぬううくぬ　ヒトヽホリナラヌ　若
どまよ。まうぶれどのどの侍ひつ。あ川　戯　言　ナガラ　暑
さたうぶれまくるなあうさ侍をアんそうひ
あまうと思ひやえうう。おとぶもうう　源氏ノカタチ　左大臣　葵ノ方
ぶひくく。うちとけうくまべなて。　源氏

腸息ノ腸ハ人声ノ字なれバけハト書ベキヲうケルハ誤ニテ例ニテ言ヲナガラカニセンナルベシ

らぶれハかうちをつうろひうぬく
ハ木丁へぶてく　湖師　たたたるのを
まのまもあるべ　鈍　和名抄帳屏
有九帳之名所出未詳同坐郎具案
儿屏有脇息之名所出未詳
あつきまとおぐまのバ　釈　おとの
おの侍ーのをうさうて源氏れ
あつにふまるぶとあるべきまと
やうふひうふのうさてそれを
少て女房おくの笑をあるうまと
源氏の制ーおぐ服息ようて
おう侍ふあるるハうさ侍を制する
侍ーいるてうるハ源氏のゆふ
ままひのんやをげあるを地より
神ーくるあるおどふ　釈　中れの寒う
くるふとまうもてハいぐくと日の
くるまくうひのぐ女房くちれ
ふをつるまあく
あぐみ　河　金槐注云天一立中央為十二時定全国云々立中央故号中神故佛方古来所違来也　釈　内裏
ようを反へ出のべバ天一ホのあさり
さる方ふあうるくう三条院ふも四
きぐおてとハ同じく塞うさる方ふあ

○さくき本

おちまてはあはゆうるるふとあつまるる　源氏
とあぐこ侍へぐ。ことうらふ。添おふり侍。とく　女房タチ　ヤカマシレイ
苦　息　倚　地　ハナヤスイ
ゆふるまひありやくくれるおぐふよひ　今夜　昏
なるがみ。うちうふふぐりて侍りうわと　塞
中　神　内裏　方
ゆもぬ。添羽　例　いもいみのふうなりうう。二　忌
係院ふるとはのーすぐふていづくまうぐへ　違　ドコ　漆
んいとあやまるよとくおいとのごもま　御　寝
ぞ。ぷとあ　ワルイ　女房タチ　れきこゆ。
きのうこふて侍ーくくはうまつる人の。
紀伊守　親
なる川れ　中

いれてさぶしく（涼）ぬれかげ（蔭）ふかゐる。と少も。いとよろ（入）
なく。あやまりきこえたう（牛）ぶらひきいまし
つべうしん所を。とのゐふ（地）きのびしくれはる（方）
まうづへどころ（数多）ぬうぢ。
がくへくわりまつりたかくふる（塞）
げくひたぶ（違）ぶへぼうさんは（他）
いとかりきあるべし。きのうこゝふおをぞと（紀伊守）
ぬへば。うけのうりあぐ。きぐうけて。（紀弓付）いよれ（退）
かみの郎君の家よ。つくもむ半ばりて。女房（伊与）
守（慎）
あんまりわうり（六十リ）まるおろして。せぐ（移）ぬ所ふ（拱）
ゐまぐだなるあげある事や侍らん。と。ちくる（無礼氣）
ヒソカニ

ちぐしくさうげ（釈）いとおろかあり（餘）いとおろかあり
ふりをもの。ぐしくとあふくあをちと
いかはなるあり
半おぐ。川入べうしん（湖下集ぬ）
ふく。れ気もあるん安さおをとと
思びくのはちくぐ。ぬハ（釈）源氏の
ちよひうの女の系あぐ。おをさあり
べーといわさて
うさふぐげて（釈）ちぐと方の寒り
ちるりふまくく川さぐ。ぬぐ女ゆた
ものぐふ。奏上ちこれ。ぬぐ。ぬぐ
さんいとりきあふ。ぬ。紀伊ち
ぐ方へぐへのあるべーと。ぬ。
うけまうおぐーちぐ。ぬて
（釈）伊を。ぬうあぐーぬ。ぬぐ。退きさ
いちのくこれ。ぬた（釈）紀伊ちの父
伊。ぬ。ぬを守とぬいぐ。ぬと
通ぐてさのいちと。女子ぬを別ぬ
てきのりきまくて。ちゆ。ぬいれち
方。ぬぐの。ぬちくるぬ。ぬ
ぬぐ。ぬ。ぬ（釈）武。ぬ。ぬ。源氏。ぬぐ
さ。ぬ。ぬ。ぬ

ようつ人もてらすもゆかくしまの
そらうらせるく寄せ来紀伊守が祖と
あるを玉水抜ふられるハとろ〳〵
らぐ〳〵うぬ雫をと
釈 とのトかでゝを拭せるあや
うく水くふとうぶれどろ〳〵
釈 紀伊ちかく係ふあうしてハとそ
こぶきど作ゆへ世俗のくあぐもまく
ハをこゝてゝおくさて
ちんでんの赤おもてゝ〳〵 釈 寝殿を
正殿と今は書院のごとしこゝの東面を
ちゝひあけまをて係氏ゆゆ迷ふとも
つらゝ源月ふ紀ちの倩ずどもの元
持くゝちゝきゝといへるよろ〳〵
そこちゝとあれ出あるく〳〵
蛍 ここゝとあれといる河ちゝ水虫
のあゝにあゝびゑの雫まハてゝ〳〵ハ
何ともあれぬ出れゆあゝとこちゝ
とあれとゝる河ゆ南ゆ〳〵 王 波殿のト
ゝ後ゝゝ出ゝるゆゝ
をとかゝてを〳〵流ゝ出ゝる泉と
あゝゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
餘 凡係ゝ海ふ引ゝハ古ゝとゝ
ゝゝゝ今ゝふゝふつゝゝふあゝ
ゝゝゝれのゝゝあゝとゝふゝゝく

ゝゝなゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いひ出ひあぐとそこ抜ひとつふ
ことあるにかハおちさうなる物ハ衝へ
さうぐしのうみよう 釈 障子の紙の
ふり 釈 釈ホ上とあるハいうぐ必げれ
あり 侯ほの紙よりのふつけ〳〵
ゆのうれ月出やとおゞせど侯あるを
やそう 拾 柔らく伝のおゆ出ハまれ
ひちやう〳〵とらへ糸もあり俗そろう
とらうまるろ〳〵
りや 拾 母屋とかハ母いきふあ
らぎおりやの上略あり〳〵おり屋を
かとうさまゞの屋やそのひき
あどの屋ろハあちこれまい伝くれハ
さそおり屋とつけくるあべ〳〵
おゞ侯とのくうまかうう見へまバ〳〵
細 左衛門尉通の〳〵 評 そのすとあ
侯つゞのゆ〳〵をうすあそうれる例
のあべ〳〵 品さの未ゆ物をあ〳〵
ゆそう伝くんゆ物ゆ〳〵
弐絵つのうれ姫あまそ〳〵
新 此年既よろ〳〵をうふ姫を玄出
より出文ハうくまゞ〳〵ふ侯のうく
釈 釈物年の御ふれ そのつゆと
出うれぬ釈ゆのうくふ〳〵そうとハ
此そのわれゆのあべ〳〵 評 釈物ふそ

なるべ〳〵。いといとうやあぐちてぞ。ぎ。ゆ。ぎ。ゆ。ぎ。ゆ

は
ハ
ふ
よ
ひ
ん
ゆ
を
び
さ
ざ
を
ろ
か
ぜ
よ
く
ん
ま
く
（釈）上の机侍の歌の題を催
る歌をこゝろ得ておのゝ
源氏こゝろ〳〵に思ひてそれ〴〵の歌
出をと録もの多くさゝろこの内と
あるてハとゝ歌様ふさろこのまゝ
もあまてゝと祝ひてまゝろこゝ
まゝけのあ花とゝ内〳〵ゝとゝ
あゝ〳〵ゝ〳〵ゝ内とあゝ
まてゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
これもすてゝ〳〵
あるよゝんともゝ〳〵（玉）さ僧ゝ歌
の羽をそゝくゝの〳〵ゝ
作〳〵ゝえ歌ゝ作〳〵ゝ
ゝけゝゝ〳〵ゝ〳〵ハえ素諸〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
（釈）あゝ花ゝ
あゝ作者の歌ゝ作ゝ
ゝゝあゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
（評）
あゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
（評）
ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

あり。（伊与少）
中よ。いとそゝひあてさろこそ。十二ゝ〳〵ゝ
（ヤウス ウナアガリテ）
あゝゝ。いづまゝ。いづまゝ。おゝとひゝゝに。（問）
（紀守朔）
ゝゝゝ。侍門のゝみれゝゝ。（赤子）
（空蟬ノ父ヘ）
ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人おくて人まさりなどくわ〜
ゆく〜とらさとをかくうハせ
とらさとらそらぐ〜とらえんぐ
まうとのほのおや 餘 玉蘭云まう
とハ真人く紀ちをさして敬せと
ものさまてう昔よりくれのくいつハ
いさらあがむる孤くとも人ハ孤と云
ちぐのよく 釈 はのおやハ他世あり
おやの下ふ加しらやくをあくめて
上のやゆ〜くをなびくう
ゆげるにおやをもまうけうとうれ
とのうさあり 後撰 いづまもろう
上をもきこめ〜おきてうく 新 かる女の伝ふ少〜そ〜そやとつまびねのさうふ〜〜てやゝをさそ〜ぜ
め〜至てのふ敬まうんとつくさ〜さそうづくまとのみのかみちの伝れ世間さうへおもまあ〜おさてとのみ
まぐく源氏のおさまうく
おさてさぐあるにあれあれ 釈 うふせ〜あ〜ハ例の男女おちのせふく縁のまく次のおそも同じさて源
氏君ハちぐ十女柔だうあるふくうまをのくまうハ
ありまかくて物〜伝くあう 餘 史記始皇本紀出不意 釈 こうろ物〜ぜ伊与外ら妻ふあうて伝くとうみさと
中ふつうて芸のちぐせハう 釈 ちぐせハ宿世の字まうゆてうの前世のお縁のまあるとタの幸不幸のまふ物て
ひつり男女の縁といふ物ハ芸うう今ふあるまで定うう〜うるれあるさ幸ふ女ハ妹ふ男ふちさぐ〜ハうれ
ふ身の上もおのれと定ぐ〜うう〜びく〜ぐよひうさるぐ
君とやう〜んな 拾 大和物語 玉虫の少方此ちぐ神の大物ふれゆていまひううるをうふ子仲ぐふ〜て
ゆうそくるうちの中ふみぐうふそうるさひづ〜うぐ君
そあうさ幸除をうづさて君のぐとくうあ〜んと我きそのうさ〜ぷハ問うけのう物く
いぐハ 餘 これをのぐあ〜んとうあうふ解さんハ誤あうひぐうのうふて君とおうハぐ〜んやとひうく〜

すぐ〜きこと。好色 ぐ〜よのうじめて 五月 抽者
うけひさ伝〜ぐなん。とやさて。引 兼 添羽 サウアリトモ
まうとう〜ちの。ベル 性さぐ〜く〜いあめ。キサマ
らんよ。おろ〜〜てんやハかのさけハいを。下 ニツカハレク 當世フウ 立 伊与ノ

釈 紀ちの妻ふ〜そもうふ〜ハ伝つううれ
ぬ

釈 紀ちの妻ふ〜そもうふ〜ハ伝つううれ
ぬ

釈 こうふ世〜あ〜ハ例の男女おちのせふく縁のまく次のおそも同じさて源
氏君ハちぐ十女柔だうあるふくうまをのくまうハ
ありまかくて物〜伝くあう 餘 史記始皇本紀出不意 釈 こうろ物〜ぜ伊与外ら妻ふあうて伝くとうみさと
中ふつうて芸のちぐせハう 釈 ちぐせハ宿世の字まうゆてうの前世のお縁のまあるとタの幸不幸のまふ物て
ひつり男女の縁といふ物ハ芸うう今ふあるまで定うう〜うるれあるさ幸ふ女ハ妹ふ男ふちさぐ〜ハうれ
ふ身の上もおのれと定ぐ〜うう〜びく〜ぐよひうさるぐ
君とやう〜んな 拾 大和物語 玉虫の少方此ちぐ神の大物ふれゆていまひううるをうふ子仲ぐふ〜て
ゆうそくるうちの中ふみぐうふそうるさひづ〜うぐ君
そあうさ幸除をうづさて君のぐとくうあ〜んと我きそのうさ〜ぷハ問うけのう物く
いぐハ 餘 これをのぐあ〜んとうあうふ解さんハ誤あうひぐうのうふて君とおうハぐ〜んやとひうく〜

ちさ〜つのちう 細 お出〜てまとらさん八源氏の中お少てハ悪あるあよ私のといふ今夫おりろ〜 餘 北夜
邪あり物語まるさ〜ものよあるやり〜う〜づ紀ちの
ふとあるぐごとく私とハ他人よむろひくうふ何ふて他人まそ
ふ世ぐ家のものこの〜伝ずるとうさ〜〜とハいろ〜 釈 私の注ハ俗語のごと〜 他人よむろひて何ふて他人まハ
みせぐ〜〜ふ〜ふ物ろ〜〜さ家物とてふ〜〜ぐ家物とてふ〜〜
さちうとうまうとうちのちく 玉 紀のちぐ〜ハいろ〜〜ふ〜〜
ハせ〜を伊勢物ハ伝く妻ふ〜〜ちハ〜〜ふ〜〜
さとうふ〜ふ〜ふ〜ぐ文上文よりのうつもよろ〜〜ぐ〜〜
他一四段ハ家ざ文よりぐ今ふ〜ぐ紀ちぐ〜〜ふ〜〜
しく今の紀〜〜ん中へ伊与外ぐ中ハ物をゆ〜〜ちふ〜〜
ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜
ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜
辞〜〜ふ世ぐ文中ハ物をゆ〜〜ちふ〜〜ふ〜〜
〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜
ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜
ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜ふ〜〜
して尾へ

釈 ちの庇北簀子ハ和名抄云
簀音責 功程式板敷簀子須乃
古床上簀竹名也
つ〜ぐ〜ぶ〜 釈 ひ〜ろ〜ひ〜ろ九
ふ〜ぐ〜ぶ〜く旦注のひ〜ろ不用へ
ろ〜ぐ〜ぶ〜く 釈 内へ〜ぶ〜ん
ぐ

ものけのくる　釈　これうふ君の
河くこれくるおひろひていふはう
けのりーんといひくさておろくと
いろくくもくのをよりのうてあ
形ーんおぐらのまく
れくるあのをうーさ　釈　あをう
ーさいをらーさをさをのうと
くるあの都てをりーきぶくもあ
るものく　評　平除く出者くの問答
ハ年表のくーきをいくーきでおろ
ぬくーを年よ平除の源氏君を母
じくるぬのをへ都をいれくるく
移くうくとぶくても　玉　或抄ふくら
とぶくてもくひけぬが移くるく　釈
此抄のどくーを怪ふんあるがふ我
うへをとひけぬがあぐるあるく
さうーぶちすぐろひくうぐ
　細　源氏の平除君をぬて抱
ーのくく障子ハ寝殿と母屋との
南面と小面との中を隔る障子
あうもぐろひくくとハ源氏の南
面とある平除とすぐろひくくを
いくく今夜源氏の寝所ハ寝殿の
西のひさーし若の間よりんぐんの東
ありてとおくーやを除のくくハ小おも
てにおふはふ小のさうーどのあるさ
よくのげくひもくとおくうさ母ハ
源氏のおりくよんをおりてのくく
ようハやを除の外ハ小西ようすぐろ
ひくるべ
中ねのくんハいづくるて　評　中ねの
君を出きるあまりでしは人湯ホ

られ移ぐぶ。いくづーぶくとぶぐさくふ法
めさくんてぐこの少れさくーぶのはるくぶの
寝ハひするをぐこるやかくいふ人のかく
まくくるくさ移くんあハれやとはんどぐんく。
やをくくおくてくちやくまくんぐ。あくつくくのおくふ
てのけのくくいづくくふおくくくくぐどくれくる
おくくくどハ移のくひぬくく。いくよくくくくん
と思ひつくをぐれどくをどハくくくくといふ。
移くくくくくくのをどけあくぐいくくくは
くくくくくく

なるまでばあぎーの（長押）ちもと（下）ぺくふーていくく（女房等）（咎）
さるあり。ちのやふ（女房付）（イちのよ）ゆあるよりてぺぐいさふん。
と待る。（下屋）（浴湯）（下）
かげぐみ（ムマウシ）をくろくふひさあげ給へまぞ。（寝）（アンバイ）（試）
あるくよりはけぐざりくるまぢ帳をさくじ（障子）
彼方ぐちよ八きて。ぺ必ちのぐちにはんをへば。（鎖）
（口）
うくびつ（韓）ぶ（櫃）（メノ）（置）（乱）（雑）
かぐちになる鉄ちけいりるひく。なまひ（中）（サオト）
しつる新ふいりるへまバ。ぺ唯ぐひとりいと
（一人）
さくやうまてふくうぺなまわぐくそ（細）（小）（ドウヤラコ、ロツカハシ）（卧）
くまでぐう（上）（衣）（ケル）（夏）

ぜるひーあぐくよくのふさとり
あくきよ紀ねく
人ぢれぬこひの（釈）人ぢれぜ密な
中陰をぢくしぢ中ねくめーつ
きバこの忘ひのひあるんちーてま
ぢくりとりつさく
ともかくも（釈）行すぢもりおせーき
ぬさく
ひのまおくりくーんちーて（釈）いきくら
行くりけくーちあくーてぢ紀ぢ柔ぢ
ねといあ伝まふ鬼字をりけり
やとおびれどくー（評）ぐんよ衣のさくり
ぢぢあるべー（刃）やバおびえく
てあるあどぢべて出あくりのまぢ
いくーくりくめぐくー
かるをくり（湖）中陰の中川のちおて
くりあるをくを行ぢーといひあー
ちああり
おあくみもあーぐつまぐ紀
（釈）いあん鬼行ぢくもぢ紀氏君の
ぢぐ紀ぢおをんてバ手ひあぢくり
まーぐ紀けくひあまバといふさく
くてあくーも（王）くてふ紀ぢあん
人ぢまつくもえぶーくらぬく
くちくくとびーく（釈）えくバモ夕

めつる人（中持君）とおもくり。中ねえくつまぢ。人（添付）
ぢまくぬねもひのちつあるくちーて。（験）
とぢ行ふをどとくくもくひ足れぢ。ぢよ（アん）（分別）
おくくちくーんちーてやとねびやまぢ。（オビエタル声ン）
（魔）
かほふきぬのさくわくぢ。おくふもくぢ。（添付）
（顔）（衣）（障）（音）
ちちけふくふくらぬ心のねどくんのちん。（ソう）
（ッジ）（ニ）（六）
ぢくくちあれど。年ごろ忘ひくくるん紀
（モ）（モット）
うちも。やえちくきんくとてなんがくるをう
をもちいぐくるもぢくよのきくハあしじ。
（待）（念）
と心ひあー行へといとやくくにの行ひて。
（柔）
ねあくくもあぐつまぐ紀くをひなれぢ。
（鬼）（神）（アラソフ）（ケスガキタ）

なりうえのぐらゐもまことびしきさくあるまじかりけりとハ夫ある方みてハいるもぐさるまひとそよ
ようあり
いきのしたあり 湖 あるこそばいのこ
をそうしとそうして 釈 このをそうしハ
うらうらくあれとえるまで清まぐつるくきのんぐうしたようけていとぐ
ありもこのまうる情あり
ふぐもあるぬうし 湖 人さぐ金
でもあるびまうふぐうをちるべ
みてかつるおをうひのかもおぐ
めたるつと 釈 おぐめたかやげて
ちざとおぐつるくいつとくし
いとちひさやるれバ 釈 上ないとさて
やうやてふくちとある意
さくぐのりくよ 釈 上ささじどち
とあうしれ
かとつる中おぐうく 湖 ぐうハ深
中おをたちりうちひさ
やくとのさまあり 鈔 やくハくをよぶ
財やもいどくハさふあるびそひけ
あくくきあひられバやくくなぐて
ぐたるまるさるをうたくうく
いうぐくうあひうちくうく

たくうくぐうよくくぐうくうくぐ。カニ
こうちちももたるやびくくあるまぐたまとそバ。モマタ ツラク
あさうくくくうくくくうくくく

さていまだかくのごとくのものひとるも
ハとてぬよ作のとくいでゝ見やう
あれどこれハ源氏ものの女ゝ等ハて
いつもゝくるまのるとのあさをふ
くゆくる何そと上下へおりてゝて
いつくゝされハ作り准へくもるべ
うつくしもおくんぞこそ

釈 こそうの手水の間ゝあまりのす
ゆそ況とハえさぞ爰ゝやあんと
いあさゝおりゝくゝハ下ゝ移しふ
ハあゝびふ様ハひゞくとゝ
いであさくハ 湖さるゝ源のゝやう
のゝをゝを往ゝさるもさゝゝあさくハ
あゝゝとゝそひあゝのゝとのひゝ
何のゝをゝ
ゝやくゝあるきくゝきくゝとゝて

花 上鶴下鶴のきくをとゝくゝゝ
鯨 花ちの流よよゝゝゝくゝあゝと
いるもきゝとゝいるも国郡の何ゝ
きくゝきゝとゝいる何ゝ書ゝふ
源の末橋をとゝいきゝさせゝと金ぬ
ゝ位ゝふふ織ふ赤ゝくちちと
けてゝくらふべきくゝのきくゝきハと
ゝをあれとゝをゝとゝ花ちの流よ
よゝゝべゝ 釈 ゝのゝハ右の流を抜き

ゝのゝくんゝとゝさゝ。ぬだゝりわわあゝよ。（死 メイワクナ）
なのゝゝるゝまであゝふ明りくゝとなゝほ（汗）
げあゝ。（流）ゝとくゝゝきゝどゝきゝのゝいゝくゝゝ（例 ドコカラ）
ゝゝうでゝ（取）ゝふゝことのゝゝゝゝくんゝあゝ（出）
ちゝゝるゝだゝゝなゝゝけゝくゝゝんのゝひゝく（盡）
ゝべゝゝめれど。（ホド）ゝゝいとゝなゝゝゝゝゝゝて（現）
とゝもゝおゝくゝどゝこゝて。（思ヒ侍）ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝぼゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かくあらやうにもぞふてとろうこ
とおぼゆるぞのこまどひハをぞ
あまんなまでふれわやうといふさと
さるべきをや　国かやうふ所ふらひ
てあるまうどにあるまうひをいかも
ゆるべき事をのあ所あるふやとこ
あいやうれ　国浅ましれこ
いとこびいあにはあうこぬのうく
釈世よ難ひあに伊氏のにはうきか
あるふ神ひていよいよ往ひをん
うのうびうれバとこ
さるうこの　湖情の方にあうひな
きものまありてをさんとを情の
おりうこ
人ぐのうこあうれのうちにて
釈ふ情の人ぐのやうにあるよ
ちひくつうにんをいうれぞれ
往いうとにんにおぐうきにぐふれ
むちぐうにぬとあをれ情ちくへて
いくうくをあにハきあくとうて素
うあうく　新女井にあうふううあ
どをおやうあれバ井くあれぐにあ
あくふうこうふ　評あうれの情いと
めぐくうちにうこうとひきすぐにとうる
もめぐくとし　釈教ふあうれ情を女井とあ

けまバ。すくうにんづきあ。ぞハんえ
ちあるとも。さるうれいうふなにまてすぐ
してんと思ひくぞ。まこれくのこめてあ
ううぞ人ぐこの聖をやだうるふぞうにんを
ちひてくいくくまバ。なよ井のこちして。
強　加　弱
さすぐにをるべくとあ。ぶ。まこと。ふこうろ
折　実
やものくくくぞ。あれぐちあるはこうろぐへ城。
ムシャクシャトシテ　ムリヤリ
いかうさなくとにひくくあくさはあどいと
泣
あそ所あるあ。んぐるくくハあれど。ぞ。ぞうろ
キノドクニハ　実ニ変ルコト
まうぐぞ。ちをくうくまう。とおぐにを。
ザンネンニアラウ
なぐさんぐくうくとおのへまバ。なぐ
空セミノ　ツライ

ハおく　あてうにくうこぐ作こ
みぐくまくぐくちをうくまく
釈凡うくハ実ふ交そうくあう
国既ふ実年ゑくくくきてかく
を見さるうハふ情のうえまハ
ぐうくくくきぐくもをうんぐうち
をくうにくくあくんとぐをあう
ぐはぐもうぐう
あくさあぐうく　国ふ情のくあう
ふひあぐさあんとすれぐもあぐさあ
ぐくくにとふうく源氏さのあぐき
めうくぐもとうくやくふ所くさるハ
ぐうく
おぐうくあにさまあるくもてて
戯不ふの系今ふて一所ふうき
女の関係あもくく
むげよせをふいくらぬやうよ
国ふををふる男女のうくくひとふる
くくふひうぬとうあもくぐあ
ぬとうあよ同ぐ釈おくほまたた
あうくくふ悠さうきまうすうくく
わくのぐすくくてうむべく
うにあのぐにうこうまうくく
剛伊ふかの妻ふあくくぬむうくの
あうてあくぐく釈わどハう限をこ

○そうさ本

かくうとまくにあ。ふ。ぬおぐさぐきぐおぐ
疎
ふうにはあるく。もくて。ちぐうくうハ
知己宿　縁
ふひ所ふうめ。むげよせをふひふくぬやう
チットモ　男女ノ中ノコト
よぐおぐくまにあふあんいとつくにとうくみ
トボケガホシ　待
らまくて。いとうくうにあ分のにあれはぐまう
憂　分限
ぬ。にあうくあぐくくのあうくて。かるはんぐへを
モト　ノマ
見まくうバあるまぐにくまぐこのこあく。
我　憑
みあにくまくふのちせりや。ともおあひあく
モシ　見　直　活本うくうくう
なうぐさあまうくをいとかうくうあるうに
如此　假　浮
和のにくをいひ所ふくまぐひあくにひ
寐
所へまぐにうくなりよ。今ハみにとれ
惑　マヽヨ　ニイカニセン

文覚の妻と宮ずまうこれを限と
ありしあづまの男まて 奥入 河
とうとうとねはもがみやよの中を
あらしあづまのこちの男とおもひ
釋 此ものがたりおもしろき所とて後世にうつ
されど所々よみがなのかしてつけるは
所あまたとりわけ六帖などを
しらぬ人のかきかへしなるべし
あるまじきことなるべし
釈 あるまじきことなるべしとあるは
のこりてといふことなくあるのみ体言と
ゝあるべしあのちせりやこゝろ
范 かの男あづまに源氏ものとくれなゐ
らばかこゝろざしおろかなりともこ
あるべしあのふやしもれむべきかとこ
ゝ所のかこ旅せバ兵のちといとん
さあるべし 釈 此旅よりこゝ旅の
附とゝんなどとせやうれまぜるう
きせあどいふせ
うりあるうそをよのなどを
玉 あハ夫のあるなるまバ二さびと金
ゝ男をべゝたまあゝざれバとうひく
ちうあく一なを金なりこハうどう
そあれうきてうをとをいとく所陸
のん粘後かくのごと

うけてとそおもつるさ間ぞふいとことわり
なり。おろあゝぞ歩らなどきあ法ふ
事ぬ（ナホザリ）きいでゝ。羽いとぞうりる歩るぞ車
ひゝ出よ。おどいつたりかみもいでゝく。
羽 女おどの出あきどへて。（サヤウニ出モハメ）よのぶくいろ
ゞせるふべきうハおどいふ。（今ト）えつハ又うゝの
ついであゝんゝともいとうゝ。さへて（ワザ〳〵ニ）
ハいうでゝ（山）ちふゝおどもかよゝん。（通）半の
いとゝりあゝ（ムリナル）とゝぼとてよいとむいゝ。（痛）
ぬくのかねもいでゝ（イヒト）ゝるゝゞばゝ。（奥）ハナチ

さゞひあゝらひうふまゞうゝあり
釈 さゞひあゝらひうふまゞうゝハ男の
さちあゝとゝ所のまゞてのそ
ありしあゝのかりの男てあるゝ
ぬくとゝさゝびようやゝ所のあるゝ
あゝゝもゝ出ゝあゝひもあゝとゝ
ゝのゝてあゝさあんものを除文覚
の妻と宮ずまうてうゝあひをるも
うりてあふまのひをうゝをよあり
さる男のあゝとゝふゝさゞひもあ
くちとゝゝてゝひまゞうゝゝ
ゝゝゝかゞゝハ男のあゝのゝ旅陸
はをあゝらまあゝ新ゝうゝ
みゝとゝあうけてゝて
河 それをゞゝあゝてゝ熟どを
ゝんさゝとおいひそ人のゝうゝに 細
古ふふゝんさゝゝあひそゝあゝを
うけてゝ人て男る面ゝさゝ
釈 寒ゝはゞの四句ハうけてとあゝ
方いうゝ人めゝそはもりゝく古今集
のゝゝハ旅よ写ゝひがめるふやけん
さてゝゝこのゝゝハゝゝやくあゝゞちゝ
をてゝゝゝゝハいゝふせんゝてゝゝゝゝ
のてゝうけゝふあゝとゝにゞゝあゝをゝ
をけゝりゞふゞゞてきゝゝてゝゝあゝ

ゝてもゝ文ひきゝとゞあまひつゝいゝゞでゝ（引 扯 源河 御文ト記）
ゞゝ。よふきゝぬはんのはゝゝさもあふまゝ
も。あゝさゝゝぬよのゝひゝゝゝゝゝゝ（浅 ツ ナサ 珍）
らゝあるゞゝきゝゝゝれ。とゝあゝゝふ（泣）
はゝゝゝゝゝゝゝゝゝとなゝあゝゝゝゝゝゝゝ（シナヤカナ 雑 数〻）
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ（忘 忙）
とゝゝあゝへぬまゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

俗のいとさくみゝ

ゝへるさま　湖　光隆の君ひとりさまあり　釈　雲井のかのゝゝへるさまとすとあるをんをおとゝ者るまやおしこさしぬげふ中ゆゝ

ことろうあるとハ地よりふ隆のゝをほゝしくるあり

おろうあしびなりあぐさあるあり　新　此ふ中とゝけうる半をバ略して物まのおろうもゝ又をて後いよく女ハ心

あぐさうあがこうるをこうろげよいひあぐさあるあり　評　実るれありしうをを指物のありておまぎまゝハしうる

まつきいくくめぐゝ　注　をこの実のれ所を定あゝわるハさるものあぐゝ　お小持よりんぎまゝハしあるふよ

すでゝ実すゝこうへとゝれるもまゝ指ぐゝ　さるハうあるまゝとゝひてあくさ者あゝとゝいとあつれあるうとあるふ

をくあ見てぬゆふ見きくるゝけをとあるぎすゝもゆをちの特ゝ文とゝ心ゝるさ心とゝつぎも半の指ゝ見てゆをえ

さまバおりされどさバうりあぐゝりく妻ゝいをん八中くふ出まぐゝハくるゝ指ゝめゝのさるゝあゝぐるべゝれバゝゝ大

くふ見ゝふひゝくゝあん実ゝあゝなどいをまゝる回注ハいとゝくゝひぐゝとゝさていぐまゝゝゝもゝあておゝとけゝさゝ海

あゝてゝく海あ

とゝもあをゝぬくゝふきいゝぐゝゝ　評　ちの手ゝ中ゝの人くゝあ見出てものいゝさゝ心ゝんるがゆくきくゝぐゝとゝしゝれくゝあゝをを

指ゝてつきせあゝゝみをゝゝとゝて立ゝあゝふ指ゝをふゝうゝるゝゝくゝいみゝゝ

さゝゝゝくくハいゝぐゝゝゝあゝゝあゝゝもゝゝくん半のいゝとゝゝゝあ見をとゝとゝ八悪ゝびゝゝるゝゝあれバ

さていゝぐゝゝゝゝ文あゝもゝゝくん人とゝみゝさゝゝて半のいゝとゝゝゝあいゝ　釈　さゝゝくくて八俗ゝゝよゝゝぐゝくゝあゝゝいゝさゝあゝり

いゝと沼ゝゝゝあゝゝゝりゝゝさゝゝて玉小持ふいゝぐゝゝゝゝのゝゝよゝゝゝゝ沼ゝゝゝゝ

ぎをのぶ中のゐどみてくる
（釈）南の簀子のあはせ方ふとしたるに
ぐしあれ中よ小障子をたてくるに
こさうしのうみよう
（釈）但し　のべく小障子の上ようの
あるべし小指よ紙ようといふなと
る説どもハ悪しかるべし
月ようむどうこうるすをこん
（釈）源氏をのぶたてのうたんをう
こる女房どものすきこよハ月ようの
むをとめてこゝ心ゑるもゑべしと
月ハ名ゐなてこう
（釈）六月のおのゑ名ごろゐるべし
光をきれるハ名ゐなて光のこう
くゐこうこうえげさやふたてては
ゐ中の新ハ名ゐくたてゐるさるこ
これを地ふうこうこう新やうふたこ
まてこう旧注ハさとびんこをゐも
やうふ記説どもゐ中ゐこうこう
しさ夜中ようも部てこうさ
のゐりこうきこうく
ゐこうゐたこのこうくさもこう
（評）ゐの名もこう名ゐのこうきまた
こくへのふこ憂あれバこうく歓あれバ
ゐりこくこ時くゐむこうゐくこて

佐き形こと名ひあるづるいようのこうあこ思
ひやこれて安ふやこんやこんとここゐころ
しくつまゝ
（元保）
月のこ
とこうこさをゐぐくよあこでなるゐ新て
取雞
あくなるまバ。障子口ぐちまでおこうふ。
明
うちもとも。人さこどくこれバひさこて
内外
くゐこうまこ入ゐのどんぼこくぐこつる
別
せたとんこ生ゐぬあり。ゐどき名ひて。
関直衣著
南のこうらんよまこぐこうちたこんん
匂欄今リテ前栽ヲ
ゐふぬ。格子
西面イツギ上
ゐもてのかこうこたあげく。

人くのぐくべこうあゐぬさてのこれ中のゐどふ
女房タチ覗簀子
生てこうゐこさこうぐれこみよゐぬこのこう
ゐここゐ障子上
ゐゐへるれこさ海を月ようむバこう
源八染
ゐゐこ名ゐどもあこゐぬ月ハ名ゐ
好色
ここここここ名ゐこうこ新さやた
光収清
ここここここ名ゐこうこ新さやた
ここここここ名ゐこうこ新さやた
みこくぬゆくこここ名あけぼのあり。
カヘツテ曙
なるまゐこ名ゐこれこここ生ぐみる人
ここぬこんこもすぐこもんゐこうこ。
艶妻
人こまこぬはんこよハぬこもいこくぬこ。
源八心痛言
ぬてやこんこすぐぐふゐこをぬこかこうこ
傳遣イいまタヨリ顧
ぐこふくいでゐひぬ。このふかこうこひ
大殿く

袍ゐも凄くもさまぐくふんもこと
ゐこ西ハひくく上下ふこくくこう
ことゐこて大くゐ附くのゐるふつけて
くくこさをこくくこゐこくこゐこゐハ
ゐこここくこくこくこくこくこて名の
あれの名ゐこむやこうこ名ゐ名ゐ
こくくこ叫例をゐこて名ゐくべこハ
さくこくこくこくこくこくこくこくこ
憂ゐこ源氏の名ゐこハこゐこ名ゐ
こくこくこくこくこくこくこくこくこ
こくこくこくこくこくこくこくこくこ
文例を示されこくこくこくこくこ
づくこくこくこくこくこくこくこ
こくこくこくこくこくこくこくこ
こくこくこくこくこくこくこくこ
こ

くまあくるあつあくるくるくる

さるのまてくうとくくう待まばよのことを
ひとてむつま待ばときうて（疎々）（世）
ありてこのかのこ（カノ小君）（小君ノ体）
をうとはおもまでどなまめかるさま
してあてびくとんそうめいれていと（源氏）（ナヤカナル）
なつうくかうひ行ふるこちに。（童）
いとめでらくうまてとやもへいめうとれ（空セミ）
君の手もぐうとひやうふさるべた（然）
手をいへ笑ておどしてもげうげよ（委）（咎）
ちづまちうればいでふうちいでふうさまど（空テコラ）（静）
いとよくいひちうせ行ふかるとうてとかの（小君）（テリ上）（ウスク）

（釈）あの部屋のあるさまをうるうるうげあるようくあてはのよきさこ

（評）

（釈）

（評）

（評）

（評

君のごとくあるすぐれたる心方よ
ふ〜ふそられまることハんなくこと
もぐせのそへる〜
きのうみすれらんよう〜
釈 紀守もたれさるんよ中将の年
をそなて伊予女の妻ふあれることを
あさ〜ものふらひくんをうけて
追従〜てをづれよ〜んとやふ方よ
小君をりてうづれてひきのそあり
くとこ今らも源氏の所方へ紀もぐ
幸ものくさはく 評 紀さぶふ君を
おそやふつげくは母ふをうけ
こうるをを流出てつひきはふふうて
中将の尼ふあるべをさ伏者とせ
らまこうるいとめで〜〜かくるのど
もをべてはあ行のはあれバをを待べ
物あひそふまう〜きあのうう〜
釈 源氏のふ君をそひあるふ小君を
源氏をそひあ〜ぶと悲じふ語ふ
る方ふ相といつ物とくれうさ紀
よおそふべきあ〜をさもも色
とう〜みあひ〜ふあるをもせて
物といくるこさてこの小君のさみを
やふは男色をあのう〜て出くる
のとおがそ〜ふあまあれこうさ

翌 ちこの日小君をめ〜られバふあるとく法
かつうふ(宇陪河)るはふみんるべきんもあ。
と中(左)ふ〜ふとのふへ(小君)でうちあこて(笑)中(河)ぎ〜ん
ぬ(紀)ものふ〜ひくんをうけて
追従〜てをづれよ〜んとやふ方よ
小君をりてうづれてひきのそあり
くとこ今らも源氏の所方へ紀もぐ
幸ものくさはく 評 紀さぶふ君を
おそやふつげくは母ふをうけ
こうるをを流出てつひきはふふうて
中将の尼ふあるべをさ伏者とせ
らまこうるいとめで〜〜かくるのど
もをべてはあ行のはあれバをを待べ
物あひそふまう〜きあのうう〜
釈 源氏のふ君をそひあるふ小君を
源氏をそひあ〜ぶと悲じふ語ふ
る方ふ相といつ物とくれうさ紀
よおそふべきあ〜をさもも色
とう〜みあひ〜ふあるをもせて
物といくるこさてこの小君のさみを
やふは男色をあのう〜て出くる
のとおがそ〜ふあまあれこうさ

従(ゲン)ちこ(小君)よ(寄)るいのれバこのみをあく(タイ)
うづさ(セツニシテ)てあ(待)りく。君(小君ヲ)ふ(参ラカリシ)ちこ(小君)よせて。
昨日 きのふまちくをなくあひそふ
まづ紀なり(暮)ぬ。とろんど(怨)ぶへぢかいうち(顔)
あ(居)ぬくみ(ドウジヤ)ぬ(係)ぶ(カヤウク)
赤 とまるこ(係)ぶいふひなのこやや。りさま(キヨウサメタリ)
そく。まる(御フミヲ)ぬ(係)ぶ。あこ(吾子)ちまどおそのの
いよれ(翁)おされよわ(已前)ぢ。ちこ(源)ぶ。
伊豫 ちまで(頸)ぶ中のりぶなくくびわて(細)
とて。ふ(フトリスギタ)つ(後)なるうる(見)ぶこまうう(吾子)く。
かくあ(我ヲ)ぶ(ビ)ぶりのふ(ビ)めりぶさりとれあこも(吾子)

まりてうくとう紀出りをちぶあて
こふかくいひ出よいうてはうさう
よふせうりうくいれあ紀人うう人
ゆくあれはあがさるとひ中将
出ふいうりてはさぶりのかたちひ
さ紀ぶりぶいへるまりくちのあ
ア(ア)ぬをあ〜ふされうる中つ紀ぶ
んをつけてようむべ〜物るを語泊
ふいさうもかさぶあ紀ハ来ぶ〜
のをこぶ中〜きあゆもあぶどと
あかぶりあるりといふべ〜
いふひあのことやあさう〜とく
釈 いふひあふ君あさまふ中将
のんようけてんぶ〜
あこハちぶ〜ぶる 新 吾子ぶ方ふ
ぶ〜ふ吾をバあもぶとも〜ふり
さてあこハとぶ子といふてちぶ〜ふ
の沒ふり 釈 汝ハちるまりれと伊
与ハよりハふふ色ちるぶとおき
よのふ〜
くびわて〜て 釈 常ハは流ハを
世の俗流ふて頸の細さハ人ハあり
ぶといふ讃れありさ流ふ人ちう
れこのりげあ紀ハいるるべし
あてうある 国 太つるとふふふて

おのふるく丈夫なるさまに原げ
もてきたるといふハ法師特じち
さまにてこゝにあるそゝて
ゆくさきにこゝろもん
湖 年老たる人あまたハ
まゐりつゝひく 釈 あの按摩
なるをさしてむまゝくするを
まゐりといふ
うちふも 釈 上ようちふもこまき
きんとあり〜ひゞさま
みゝつゞの 河 御匣殿内蔵寮
外御服あゞ裁縫所之頭優院御扶
釈 今世よお御戸あゞいふゞとにぶと
貞観殿中ふありとんてうさにゞこハ
ゐゞとあれハ源氏さのゆゝげ反へ
低江人妻よ庶人もおなを東風ぞうを
いふくとんてゝう
うゞ〜しきなさま 新 めくるまま
じにたるのふちさをさのにぎゞち
よ参つてへゞせるふゞゝにをを副
とり添んりのとゝ 釈 四位ふと
をへんなのとりつゞけてゝゝゞ〜と
あるハゝろゆゝ
いとうにあるゞく 玉 安原の妻と
宣ふれさ身ゐてる失の源氏ゐゞ

ゆくさきにみ向来短
ゐりゝん。いゝゞ
を。源ゝ
ゐひゝく。内裡
わゞみゝ御匣
なゞもきさせ。実
うひまふ。空ハ
いとをされ〜。落散
ばかりゞゝ
えをいとつ二アハシカラズ

ゐゞとゝ
ゐりゝ
ゐゞ
ゐゞ
ゐゞ

とんのうあもいとわしくおぼゆまづ
空セミ
まこのうちに日ぐれぬ
内裏 程
くれいこまちいでのひくぶさうよまろで
忌 待 出 俄 退出
まふまひしてみちのおどよりおはしまし
紀 守 道 程 中川の家へ 面目
とうこまりよろぶこゑはひるつる
畏 悦 昼
よりかくのんこひよりもとのおひがまう。
如此 契
あけくるやうつまひされば。こよひ
明 暮 遷 馴 今夜
もまづめいでこそ。女をばるはきうてこ
一バンニ 空セミ 消 息
ありてるよおぼしめしたんおびた。
謀
かくしこひあされ御どさわとてうち
浅

まづのくれば 王人げあるさまにて源氏をよろこびなんどいとこまやかにかたらひて
源氏 セ
くてまゐりぬ。ひるはよ人のゆるしなくまゐりそめぬれば
ひるいとくるしうあやまりくれば。釈ちかう
いとしとあるまでハ世間のなかのよ
よう人なやまりくれバ。こゝろ
よりハ世ようるうをくよ
いひくうこゝハせ。とまぎ
宇佐の御へよくやひかつだ
所労あまびそくよ肩係あどうち
さうせんと源氏の御方ちくて役
ゆ。ひをあんとひて中ねが局へ
ゆくさまこさて中おをとろゆくこハ
かの夜れんを御さればうがよさま
とよくれバとてあるべいとあやさ
かくまつよ 王かれといくれて和
をりおう又ちうつぎくうるふ
まてるふてくれんさあよといふさ
あるを後の人ぶりのまあれを
いでとふひく上あるをバさう京
除きこうろ釈初の流よろ一後の
流ハひがとこかれハ仲云ておくれ
平とうふさこ
さるふして釈京ふをまうんの心とを

とけ。人ぶあるにありさまにて源氏をまりて
スボラシキ セ
ゆめれやうまてすだるすなぶ紀を。又
やくんん。とひこうぶれて。釈さてもちつけ
加 ヤリソノマデ 待 ウケ
ゆえさせんるすのまびのくれバ。こゝんぶ
カヽヤカシ 源の御前
いあるかぶよいとうるぶうるまびバうるはうち
ユク アヒダ 待 氣 近 ワヅラハシクキノ
いくしなやまりうるまこぶ。おのびてうち
ドクナリ 悩 ヒソカニ 行
半ろうせちるぶもきんよほどとれまてをと
敵 離 間 ヒラシ
てとうるぶ。中ねといひうぶけがみうる
前ニアリシ中将ノ君ノ 局
かくまよ。ようぶろひぬさるんして人とくまづ
隠 移 源ハ 御供 疾 ネサ
ふるくぶ。をうぶをうてあれどこゝんいんうづ
セ アンナイ
あるびよりの所もとああらるてとうる

いとあさまーく　釈 中條の女房は
局よ迹へくるをえてふた奥をさま
ーーくるさねつてしハまるーのさま
ふきぬバうり　釈 わるく法もすぎ
わどよいふく俗ふるぬだろうとふさ
をさるる尼人の　湖 者のあるぐちち
ちるの ハ世よ忘むすだといひあど
さくるあり
人くさけどおさ人さをて
釈 病あれバ女房どもをさげず
胸腹など押へさせて侍れバ法ありと
いくといふさあやーとそろーんという 賦
ちるさぐまうぬる身のおぐく
釈 受領の妻と平格の宮うる身
といふをおぐえハ人のおりそくふて
こ、ハ身の分ひ仕合せをいふを
すだるーおやのそく　釈 蓬生の
中ふしおやのはげとまうくうと
あるとう〜父母の俗ばのおもげよ
えやうあるをとまわるといふる
ありとありれある況へふるさこハ
父母のあをさーていうう
ほんくろも　釈 さだうの源氏の巻
をとれちぬやうふん源つもとく

よとけくぐぷかぷらうじて半ぐどりきてり。
いとあさまーくを（小兒ん）ーとそひくぐいふうひ
なーとおぼさんとなるきぬぐどりいくバうく
そーうーぬんハつうものぐをさなる人の。
かーとといひつふるパいみーくいむある
ものをといひおどーてぐちあやはそれバ。
人くさけどおさくさせてるんとやさんさせよ。
あやーと半まもくちうんといひさふち
くぐんのうちよはぐとうくちれさぐまのう
ぬる身れおどくーぐーすだまーれやの
はうまひとちれる。ぬるさとふどうぐ。半ちぬ

（小兒ん）ヤウクノコデ　タクヅネ（サグリアタリ）来　ツレナシ　タミカヒ（ゆ汙）　泣　ホドニ　幼　使　忌　傳　嚇　（ゆ汙）　（侍ル）マウシアゲヨ　押　（合）避　フラチナ　言　シギナ　品　定　過　親　オモカゲ　留　故　郷　ノマ、ニテ

いくふねどちーぬやうに
国 源氏ものはこうぐーは男のふ
どどちーぬやうふ
くふどーも　釈 ほどくうとうと
ちどーもむいくくさんぐふハらひ
ちうちうちうものくさんぐふ
いうちひうるんすぐも　釈 既おとの
妻と宮ちうーうと上ハくハうーもひ
ちうんおとせのおを源でとく
むーんよんづんあくて　釈 無心ハん
あくあさけのきんんづんあくあさけ
ちんんのとあぐんもかくて止ちんと
ちうちーく
ふうく　国 ちうのハぐるうーく
ほふ不用不要ちどのをを知てを
ちのさうふれまてるハくふれのバ
ちふハさもるべられどとこ郷ーバを
釈 字ハ不用ちべー体字ようと
うくべーいうづーあうさく
あづーうあうるくのねどを
釈 このをうーの下ま必脱文あど
このをうふてハをくどとを系ハ身も
いくとぐうくとあうぬさとーある
ハ源氏ののをまふをあるをめづくう
あうるくのねどをとあハ源氏の

さうふをまうちつけ半ぐぶ。をうーくあや
いうーまーちひてちひちーぬぐくふんうつ
もいうよわどちーぬやうにおぼをらんとん
あづーもむいくさすぐよおもひみぐる。
とてもかくて。今ていふちひあんをさぐせ
なうあ々ねバ。むづんよんづきなくくやこ
あんどちひをてるう。男ハいふふぐうう
なをんどちぐ
まちちーまへるーよふーのうなれよーを
ゆるれバあさくめづーーあうるんれ
わどをを身もいとをづくくてなうぬを。

（強）（御心ヲ）　消　際　サウハイフモノ　宿　世　ミアハセ　止　果　（小君カ）　幼　不　用　キヅカハシク　（小君ヲサリテ）　待　臥　（係）　（係）　モノツブレタ　珍　空

といとをかしうきけそこにあり。とぞ(シバラク)
おもはれぬ。いとをかしうめでたうしとぞ(歎息ライ)
おぼしける。
源氏 ちるきはのあををちこちでうれたちのたに
ふあやをくまどひぬるうれ。やえんうこそ(遅イハウヤウ)
なるれとのたへつり。なもさたぐよまどるまれ(キヨウモナク イノクマヘバ 空セミ)
ざわるまじ。
うぐあるぬふせ屋よゆる名のうけよ(生)
あるふもたのぶきゆるちるきはのとゆえ
ふ。ふ思いとはいはりさよ。移ふくも(消 源ノ)
たうでまどひあるる紙。人あやとんすらん。(アチコチ上 フシギナ)

例
御伏
壁
多
源氏
メツタニフヨウラシク
似
並々
完テ
シンダワイニ
ムサクロシウ
ユケヨ
ナゲニ
マヨ
吾子
ツラガリ
ひとくとうす。まこいの人くはいぎくあれよ。
ぢぐまちるまどの人おもはぬ。おがく
きくちのやまうそるも移さく。
消 サンネンニテ
かくふつけくてなもとまるまとうつは
如 此有 ハンアンハ
おぼ。あぐ。めざ。ぢくたくまま。
サ三アメ(上) シンダワイニ
さぐ我とおぐ。ぢもえおがくちり
マヽヨ 余ヨ サウモ キル
まぐくかくまくくん所よぐぶ。あかみて
余ヨ デモ ヤダモ 率
いけとの我へど。いとむつうげふさ
ユケヨ 小元行 ムサクロシウ
こんくまくく。あすくゆるあれば。
雑竜 モッタイ
こげゆとゆ。いとちりとゆをり。よ。あこ
ナゲニ 小元行 マヨ 吾子

よくくうさてせ数あくぬ名の
うさまとゆるる天然のめちるうる
月のやくさふてかくおげ信まを行
まさあくくかられさもあくどをと
せえふひつるさをこそよつあていろ
玉 上るいあ所が妻とをまれ嬉き
名のうさまくくの人のゆ我かくのご
とくくくくトロかあるかもけまど
ゆひきゆるようくさて男もきゆち
も平本の添れ詞
ゆえいとくくりさふ 秋 この男月
婚そもふをつくくるのをあ
ちくさるふてそなちあさ年つなぐ
もびきふ 秋 これは氏そのもひまよ
ぐくゆれくあれ平悩くさを悩ふ
引ふとふ上ふひつげてりのり
とあるふおふ花猫送ふるふ動て
ゆくれせるをあがるくへるは氏男
のはるひくとゆしふくくとゆる
さふるべ
俗の人くは 湖 は俗の人おもはぬ
あくるる我らおとあれば例のと
すさまくく 玉 不思ふあぐ
秋 独森くあぐまるくく 湖 純きゆるくる

本とおかはうあどつまこかれこをいはい
ぢきこそ侍とこ（釈）こゝらのがるハぬげ
かゝるさこ京本の稍こかよりこ
ゝる或八侍さこゝ本の孫あがる
とゝるかもあゝんゝとかゝ孫後ゝ
ゝゝふつけてこそゝもとまれ

（湖師）こちつけのちんぐゝこあどハ
このまゝゝ侍ゝ中上すて有ゝ
ゝこかやゝゝよれあれかゝ孫のゝち
とまるゝとゝ（釈）ゝハ侍ゝれゝよ
且かのこゝり

ゝゝげかとゝかや　（玉）西のさまむさ
むさとゝてゝ侍もあまこゝでひかそ
侍ゝバさゝる侍ゝ侍こゝゝ人ハかまゝ恐ゝきこのゝゝせるふて所のさ侍れ伊氏ゝへ世まゝあゝゝ
ようあゝぐゝかすてこゝのゝひくゝゝ　（釈）ようゝさゝバせめて侍ゝゝ我をすてかゝのゝひくゝ侍例上計ゝめすゝゝ
これ上かもゝゝすてこゝゝ男色をちのゝゝゝゝる世ぎ侍ゝゝゝ侍ゝゝゝゝ

おかさるゝゝ　（玉）如侍ゝゝこゝゝ侍ゝ式アゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ